

近代群馬における消防ラッパ譜の制定とその変遷について

The Musical Scores for Fire Bugle in Modern Gunma Prefecture

奥中康人

文化政策学部 芸術文化学科

Yasuto OKUNAKA

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

群馬県では、公設消防組が設立された1894年に、広くラッパが配備され、組織的な練習もおこなわれていた。ほぼ同時期に、消防用のラッパ譜も制定されていたという。本稿は、1890年代～1940年の7種類の消防ラッパ譜（「喇叭ノ符」（1895）、「喇叭符」（1895）、「喇叭符號手帳」（1896～97）、「消防の栞」（1908）、「消防喇叭音譜」（1929）、「消防喇叭教本」（1938）、「警防喇叭教本」（1940））の内容を分析することによって、近代群馬にどのような音楽が鳴り響いたのかを明らかにすることを目的としている。

群馬県の消防ラッパ譜に収録された楽曲は、消防のために作られたオリジナル曲と、軍隊のラッパ譜によって構成されている。軍隊ラッパ譜から転用された曲の多くは、1885年に刊行された『陸海軍喇叭譜』とその改訂版を典拠としているが、1890年代のラッパ譜の中には、1885年以前に陸軍が使っていたフランスのラッパ譜も含まれている。1920年代には、群馬のオリジナルのラッパ文化がわずかに芽生えようとしていたが、1938年のラッパ譜では、ほとんどが『陸軍喇叭譜』の曲で占められることとなった。

In 1894, when public firefighting groups were established, Gunma prefecture widely deployed bugles, and workshops of playing bugle were also conducted organizationally. In addition, it seems that the bugle call was also established at the same time. In this paper, I would like to clarify what kind of music have sounded in modern Gunma by examining the contents of seven different versions of fire bugle scores from 1895 to 1940; *Music for Bugle*, 1895. *Bugle Music*, 1895. *Notebook of Bugle Call*, 1896-97. *Firefighting booklet*, 1908. *Music Score for Fire Bugle*, 1929. *Instructional Book of Fire Bugle*, 1938. *Instructional Book for Bugle of Civil Defense*, 1940.

The music, recorded in the fire bugle score of Gunma, consisted of military calls and original calls made for firefighting. Most of the music diverted from military bugle was based on *The Score for Army and Navy Bugle* published in 1885 and its revised edition. Moreover, the bugle call and marches originating from France once used in the army before 1885 were also included. In the 1920s, the bugle music culture was developed in this area, but it has been dominated by military calls and marches since 1938.

はじめに

日本における西洋楽器の受容といえば、まずオルガンやピアノを思いうかべるかもしれない。だが、唱歌のためにオルガンやピアノが必要とされ、学校を中心に広まったように、消火のためにラッパ（bugle）が必要とされ、消防組を中心に広まっていたことは、ほとんど意識されていない。

筆者は、ヨーロッパ起源の鍵盤楽器だけでなく、金管楽器も日本のあらゆる市町村に普及していたことの重要性を指摘するために、対象を長野県に限定し、消防ラッパの普及と展開の具体的なプロセス——まず明治20年代後半以降、消防組の演習や巡検など、訓練・儀式での必要性からラッパが配備されはじめ、大正期にはかなり多くの町村に「普及」したこと、さらに、昭和初期には諏訪大社の御柱祭にも転用され、1980年代以降になると「消防ラッパ吹奏大会」という競技会が開催されるなどの「変容」過程——を、拙論「長野県における消防ラッパの普及と変容」として、昨年度の本学研究紀要にまとめた¹。

しかしながら、明治～昭和初期の消防ラッパが「どのような音楽」を吹奏したのか、という点については、ほとんど明らかにすることができなかった。それは、長野県で用いられた消防ラッパの楽譜が（少なくとも管見の限りでは）現存しないことに起因している。史料のなかに、「喇叭（集し）」と明記されていても、楽譜が無ければどのような旋

律なのかは、全くわからないからである。この欠落部分を補ってくれるのが、長野県のお隣の群馬県である。

筆者は、長野県の消防ラッパを調査している間に、長野県外の消防ラッパについての資料も、できるかぎり収集し、目を通すようにつとめていたが、ある時、群馬県の資料が多いことに気がついた。そこで、長野県の調査が一段落したあとに、対象を群馬県にシフトし、集中的に調査してみたところ、1895～1940年の消防ラッパ譜、7種を手にすることができた。他の地域に、消防ラッパ譜が全く存在しない訳ではないのだが、ひとつの県内に7種類もの消防ラッパ譜が残っているのは、かなりレアなケースであるように思われる。ところが、この7種のラッパ譜を丁寧に精査すると、類似しているところもあるが、内容はそれぞれ多種多様で、時代によって異なっているのである。

そこで本稿は、この7種のラッパ譜を比較対照し、明治後期から昭和初期までの消防組のラッパ譜の変遷を検証することによって、群馬県で鳴り響いていた消防ラッパの音を——具体的にいえば、たとえば、明治時代の群馬では「集し」のときに、どのようなメロディが鳴り響いたのかを——明らかにすることが目的である。

後述するように、消防のラッパ譜は、軍隊のラッパ譜から影響を受けているため、本論に入る前に、近代日本の軍隊（主に陸軍）のラッパ譜についてごく簡単に紹介しておきたい。

1. 幕末維新期から1945年までの軍隊のラッパ譜

いわゆる信号ラッパは、幕末維新期にイギリス軍やフランス軍から伝えられ、五線譜のラッパ譜が掲載された『英國歩兵練法』（1865）²や、フランスのラッパ譜を翻訳した『喇叭符号』（1867）³が刊行された。明治期には、フランス式の軍制を採用した陸軍ではフランスのラッパ譜が、海軍ではイギリスのラッパ譜が用いられていた。さすがに幕末維新期の楽譜をそのまま使っていたとは思えないが、具体的にどのような譜面を用いたのかを示す資料がほとんど残っていないようなので、よくわからない⁴。

しかしながら、英仏と同じ楽譜を使っていることが不都合であること、陸海軍は共通のラッパ譜を用いるべきであることが指摘されるようになり⁵、日本独自のラッパ譜として、1885年に『陸海軍喇叭譜』が制定された。注意しなければならないのは、この『陸海軍喇叭譜』に収録された221曲が、そのまま1945年まで使われたのではなく、毎年のように改正され、1903年には陸軍と海軍で分離し、最終的には曲数も3割ほどに整理されたため、1885年のラッパ譜と1945年のラッパ譜は、共通する楽曲もあるが、大きく異なっている。

本稿の目的は、群馬県内の消防ラッパ譜（7種）に収録されている個々の楽曲を明らかにすることなので、軍隊ラッパ譜の変遷には深入りせず、とりあえずは筆者の手元にある年代の異なる5種類の軍隊ラッパ譜を参照する⁶。

消防におけるラッパ使用についても言及しておく、1880年に東京で編成された消防隊がラッパを用いて軍隊式の訓練をおこなったのが最初とされている。このときに消防用のラッパ譜があったようだが⁷、消防隊が1881年に廃止されたため単発の試みに終わった。その後、1883年に福岡で⁸、1885年に岐阜で⁹、1887年には再び東京で消防のラッパ（消防機関士附属喇叭）が用いられたという記録があり、1887年の関係文書には別紙に消防のラッパ譜（30曲）が添付されている¹⁰。

2. 文献調査から浮かびあがる群馬県の消防ラッパ

1938年12月の雑誌『大日本消防』には、群馬県警察部保安課の中澤重雄が寄稿した「消防喇叭に就て」という記事が掲載されている¹¹。中澤は明治期を振り返って、次のように述べた。

本県消防組としては明治二十七年二月勅令により消防組が組織されると同時に各組共喇叭係を設け、之が音譜の如きも（…）¹²極めて細密なる制定を見たる処であつた。

1894年に公布された勅令第15号「消防組規則」によって、群馬県内でも各地に公設の消防組が創設された。しかし、この「消防組規則」にも、その直後にだされた内務省令「消防組規則概則」にも、「喇叭」の文字は見当たらないため、「同時に各組共喇叭係を設け」は、いささかオーバーな表現に思える。

長野県では、長野県令「消防組規則施行細則」（1894年5月）において、「消防組八号令伝達ノ為呼子・喇叭・

鼓鉦ノ類ヲ用ユルコトヲ得」と、初めて「喇叭」の文字が出てくるものの、実際には消防組の所有はかなり限られている。その4年後、「消防組規則施行細則」の改正（1898）によって消防組が備えるべき「器具建物」に「喇叭」が加わり、広く「喇叭」が配備されたのは1900年代にはいつてからではないかと、筆者はみている¹³。

しかし、1890年代の群馬県内の市町村史を調査してみると、同時期の長野県よりもラッパに関する記述が多いように見受けられ、県内すべての消防組ではないにせよ、かなり多くの消防組に「喇叭係」が設けられていたことは、それほど間違っていないようである。

たとえば、前橋市の公設消防組では、1894年度「歳入出追加予算」（11～3月）の備品費として、「喇叭九個、金一三円五〇銭」が計上されている¹⁴。当時、前橋の消防組は9部（「部」は、現在の消防組の「分団」にあたる）で構成されていたので、消防組の1部につき1個のラッパが配備されたのだろう。

富士見村（現前橋市）でも1894年11月に15部の消防組が発足し、

消防組は警察の指導下にあつたが、初め訓練と称したその団体訓練は、軍隊の教練を模倣したものであつた。ラッパの号音も、小旗を指揮刀に模した指揮者の敬礼法を初め、各個教練、部隊教練共軍隊教練のようなもので、毎年警察官の点検を受けた。

とあり、ラッパが存在していたと述べている¹⁵。団体訓練は、軍隊を「模倣」しているものの、実際には警察の「指導下」にあったという点にも注目したい。

軍隊式の訓練についての言及は、他の文献にもみられ、横野村（現渋川市）では、1894年に、

消防組の一挙一動も亦軍隊に習つて喇叭によつて命令することとなり、一部に一ヶづつ計八個 喇叭を購入し、部内の消防手の内から一人づつ喇叭手を任命して吹奏させた。

と（文脈から判断すると、引用文中の「軍隊に習つて」は「軍隊に倣つて」だろう）、ラッパが軍隊スタイルの訓練との関連で購入されていることがわかる¹⁶。1部につき1個という数は、前橋市と同じである。

桐生では1895年4月14日に、桐生消防組の初めての点検が行われた。その「点検順序」には、「各部集レノ令但喇叭」と記されている。『桐生消防史』によると、この点検は1894年に通達された「消防組員集合整頓ノ方法及点検順序」に基づくもので、その第1条「集マレー」ノ号令ハ喇叭ヲ以テス」が引用されている（楽譜はない）¹⁷。『桐生消防史』以外の文献で1894年の「消防組員集合整頓ノ方法及点検順序」を筆者はまだ確認できていないが、1894年にラッパ信号の規定もすでに存在していたことになる。

それどころか、東村（現前橋市）では、1894年の公設消防組設立より前に、すでにラッパが用いられていたという記録もある¹⁸。

本村ではこれ〔引用者注：「消防組規則」の発布〕に備えて早くから下新田新井藤五郎（巡查部長）や、前箱田八木忠三氏等が組員の隊列運動やポンプの操法、喇叭など指導されたということで、漸く明治二十七年に九部編成で発足した。

東村の消防組の訓練も、やはり警察の指導下でおこなわれている。

それまでの民間の私設消防組と異なり、公設消防組の大きな特徴は県の管轄、具体的には警察の管轄となることであり、それゆえ、巡查を訓練する際の操練が、消防組にも用いられ、それに付随してラッパも消防組に入っている。また、公設消防組が創設された時期の訓練が軍隊の模倣であっても、指導者として軍人がいたことを窺わせる記述はない。

ただし、消防組によっては、ラッパの記録がまったく見あたらない組もあるため、すべての消防組にラッパが配備されたとは、断定できない。しかも、こうした市町村史の類は、先行して刊行された市町村史が言及した話題、叙述のパターンを踏襲しがちなこともあり、たまたま軍隊式の訓練の話やラッパについての記述が偏って取りあげられているだけなのかもしれない¹⁹。

3. 7種類の群馬県の消防ラッパ譜

先の中澤重雄の引用文の後半にある「之が音譜の如きも

（…）極めて細密なる制定を見たる処であつた」を信じるなら1894年に、また、群馬県立文書館に所蔵されている「消防喇叭譜相定二付各署宛指示」²⁰が、1896年3月7日の日付であることから、1894～96年あたりに「音譜」つまり「消防喇叭譜」が存在したことは確かなようだ。このことは、残されているラッパ譜によって、裏づけられる。

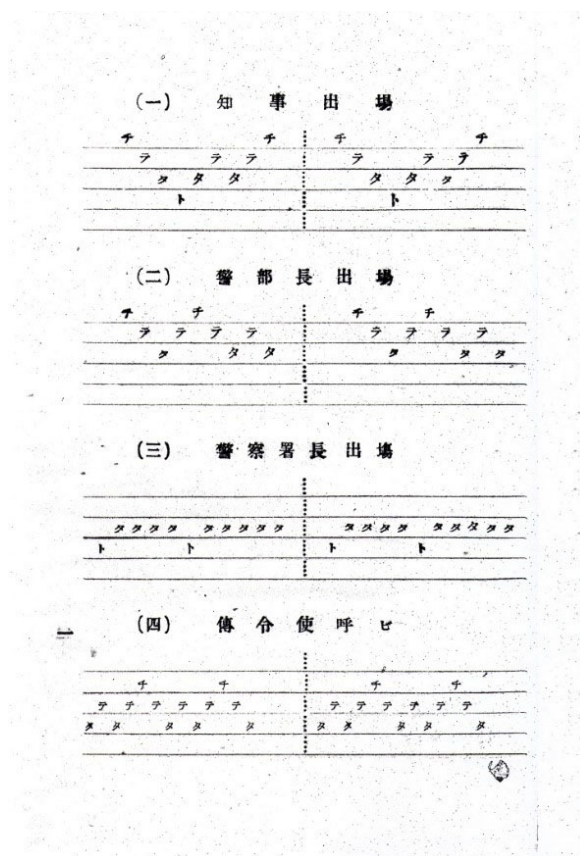
ここでは、筆者が得た7種のラッパ譜（A～G）について、それぞれの概要を説明しておきたい。

A「喇叭ノ符」（1895）²¹

1895年3月に修文館（前橋市）から刊行された『消防組操法・雲龍水取扱法』という小冊子の巻末に収録されているラッパ譜で、23種類の楽曲が掲載されている。編者は高橋彌之助。

楽譜を一見すると五線譜のようだが、通常の音符ではなく、「ド」が「タ」「ソ」「ミ」「ソ」の5音で、当時は、この5音をそれぞれ「ド」「ト」「タ」「テ」「チ」と呼んでいた。しかし、文字の「ド」が「タ」だけでは、具体的な音の高さをイメージしにくいので、視覚的にわかりやすく認識できるように、この楽譜が考案されたのだろう。

『消防組操練法・雲龍水取扱法』の前半「消防組操練法」は、消防組の操練（訓練）についての解説書で、そこにラッパについての言及は無いものの、消防組の操練においてラッパの使用を意図したことは明らかである。



A「喇叭ノ符」（1895）冒頭ページ

B「喇叭符」(1895)

『桐生消防史』に掲載(岩下文書から転載)されており²²、桐生消防組が1895年4月に初めて消防組点検をおこなった際に用いられた10曲のラッパ信号として、以下のように楽譜ではなく文字が記されている。

一部吹呼	テチテタ
二部吹呼	テチテタ、ター
三部吹呼	テチテタ、タター
四部吹呼	テチテタ、タタター
署長出場	トタタタートタタター
組頭吹呼	タタタテテタタタテテチー
引揚	トトタチテタチテ、タトー
他村引揚	テターヤ、テターヤ
始メ	タタ、タトタトテテテ
止メ	トタテテテタトタテテテター

Aと同じ「ドトタテチ」の記譜法なので、たとえば「一部吹呼」の「テチテタ」は、「ミ-ソ-ミ-ド」という音の並びになる。ただ、やはり「テチテタ」だけでは、音の長さが判らないため、正確なメロディを把握することはできない。メロディが把握できない楽譜など役に立たないと思えるかもしれないが、こうした文字譜は備忘録のようなもので、すべてを完全に記録する必要はなく、記憶の補助をする機能を果たせば十分である。逆に、実際のラッパのレッスンが口頭伝承的におこなわれていたことを示している。

Bは1895年4月の消防組点検の際の記録で、先のAはその1ヶ月前に刊行されている。収録されている楽曲のタイトルをみると、Bの10曲はAにすべて含まれていて、「ドトタテチ」の文字の並びもおおよそ類似しているが、完全に一致しているわけではない。

C『喇叭符號手帳』(1896~97)²³

群馬県勢多郡荒砥村(現前橋市)の消防組のラッパ手の根岸泰司という人物による²⁴、和綴りの帳面に記された手

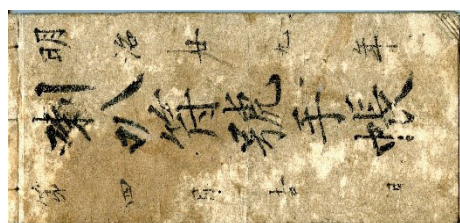
書き譜で、約60の楽曲が掲載されている。表紙には「明治廿九年」とあるが、中のページには「明治卅年」とも書いてあるので、おおよそ1896~97年あたりに作成・使用されたと思われる。記譜は大部分が五線譜だが(五線も手書き)、筆記をした根岸が音の長さ——4分音符、8分音符、16分音符など——の記譜法のルールをよく理解していないため、判読は少々難しい。もし、根岸が原本である五線譜を横において、それをそのまま「写譜」したなら、このようなことは起こりえないはずなので、かれはフィールドで鳴り響いていたラッパの音を耳で聴いて、貧しい音楽知識にもかかわらず、なんとか独力で「採譜」をしたと推察できる。「ドトタテチ」の文字で記されている曲も数曲ある。

また、楽譜ではないが、「明治廿九年三月下大屋村産泰社内二於テ稽古」²⁵とか、「消防喇叭卒業ヲ証ス／大胡警察署」という書き込み(後者は、公的な証書ではなく、戯れ書きのようにも見える)や、そこに参加したラッパ手の名簿(不完全なものを含め3種)も記載されている。この名簿からは、荒砥村消防組(12部)には、1部につき2~6名のラッパ手がいたこと、荒砥村の近隣の粕川村消防組第6部のラッパ手(4名)や、木瀬村消防組のラッパ手(3名)も参加していたこと、また、木瀬村の3名は「教授員」であったこと、この手帳の筆記者の根岸泰司は、荒砥村の消防組三部のラッパ手であることなどが読み取れる。

1896年に、大人数の稽古が神社でおこなわれていたこと、あるいは警察の指導下の講習のような機会があったこと各部のラッパ手の人数や名前など、当時の実態を具体的に示す一次史料として非常に重要である。

D『消防の栞』(1908)²⁶

前橋消防組の組頭、荒井久七が編集した『消防の栞』(前橋市)²⁷という小冊子の巻末に掲載されているラッパ譜で、約60曲の楽曲が五線譜で記されている。五線譜の最後のページに「関口佐吉」「岡安種吉」という名前があるので、このラッパ譜の編纂にかかわる実質的な責任者は、組頭の



C『喇叭符號手帳』の表紙



C『喇叭符號手帳』の冒頭ページ



D『消防の栞』(1908)のラッパ譜の冒頭ページ

荒井久七ではなく、この両名になるのだろうが、かれらについての詳細はわからない。

このラッパ譜では、ほとんどすべての「ソ」の音が、五線譜上の「ラ」の位置に、ときおり「ファ」の位置に記載されている。これは、きわめて初歩的なミスに見えるかもしれないが、この当時の手書きのラッパ譜では珍しくない（AとCもこのスタイル）。そもそもラッパは「ラ」や「ファ」の音が出ないことから、「ラ」や「ファ」の位置に記載されていても、「ド」の下に記されてあれば、必然的に「ソ」の指示であることが分かるからである。

E『消防喇叭音譜』（1929）²⁸

1929年4月1日に煥乎堂（前橋市）から刊行された小さな冊子で、ラッパの楽曲がメインの楽譜集。凡例としてラッパに関する基礎知識や簡単な楽典のページが冒頭にあり、ラッパ譜（58曲）が収録されている。奥付には、「群馬県警察部編纂 消防提要附録（非売品）」とある²⁹。

そこで、ほぼ同時期に煥乎堂から刊行された『消防提要』の例言をみると、

本書ノ（…）音譜ハ群馬県師範学校附属小学校谷内田盛一氏〔、〕前前橋消防組喇叭長黒川松太郎氏ノ苦心ニナリヤルモノナリ

とあるので、谷内田盛一と黒川松太郎が、附録のラッパ譜を編纂したことがわかる。

これまで刊行されているA～Dの五線譜には、記譜上の初歩的なミスや誤植と思われる個所が多々あったが、小学校の教員（音楽教師だろうか）が編集に加わったことがプラスに働いたのか、この譜には、それまでのような初歩的なミスはほとんどなく、正確に記されている。

F『消防喇叭教本』（1938）³⁰

表紙には「昭和十三年三月改正／消防喇叭教本／群馬県警察部」とあり、編集兼発行人として、群馬県警察部の中澤重雄の名前が記されている。刊行されたのは1938年5月なので、先に紹介した中澤による雑誌記事「消防喇叭二就テ」（1938年12月）と時期が近い。巻末に〈大日本消防歌〉の歌詞と楽譜も掲載されている。

改正は、群馬県警察部（6名）、高崎歩兵連隊（1名）、各消防組の代表者（18名）、合計25名によって構成される「消防喇叭改正委員」がおこなった。収録曲は25曲で、Eの半分以下になっている。

群馬県警察部長、石原専一は「序」のなかで、このラッパ譜を編纂した背景として、

従来本県消防組ニ於テ使用シ来リシモノハ時代ニ即セザルモノ、或ハ複雑ナルモノアリ、相当修正ノ要アルヲ痛感スルニ至リタルヲ以テ多数喇叭手ガ陸軍出身ナルニ鑑ミ、陸軍喇叭譜ヲ根幹トナシ消防独自ノモノヲ加味シ茲ニ全面的改正ヲ行ヒ尚従来使用ノ譜ハ単ニ消防操典ノ附録ト為シ在リタルヲ以テ新ニ訓令ノ形式ヲ採ル消防喇叭教範トシ之ガ講究ニ便ナラシムベク本誌ヲ上梓シタル次第デアル

つまり、それまでの消防ラッパ譜が、時代にあわなくなったこと、複雑すぎることで、ラッパ手に陸軍出身者が多いという事情から改正する必要に迫られた。また、それまでのラッパ譜は「消防操典」の附録にすぎなかったが³¹、正式に訓令「消防喇叭教範」になったという。改正に協力した高崎歩兵第15連隊歩兵曹長小林良夫への謝辞も記されている。

冊子の巻頭には「敬礼歌詞」として〈君が代〉、〈海行かば〉、〈皇御國〉、〈國の鎮め〉、〈吹なす笛〉の歌詞が掲載されている（これも、軍隊のラッパ譜に倣ったものと考えられる）³²。また、ラッパに関する基礎知識と簡単な楽典のページに続き、訓令甲第五号（保）「消防喇叭教範」が掲載されている³³。

G『警防喇叭教本』（1940）³⁴

1940年7月に刊行。編集兼発行人として、鹽野光全という人物の名前が記されている。1939年の「警防団令」による消防組の警防団への改編にともない、先のFを改定したものである。収録曲は25曲。ほかに、「敬礼歌詞」、「訓令甲第九号（警防）」として「警防喇叭教範」（1940年2月23日）、ラッパに関する基礎知識と簡単な楽典のページが含まれているところは、冊子の体裁を含め、Fとほぼ同じである。

ここまで、年代の異なる7種の消防ラッパ譜を概観したが、もちろん、この7種で群馬県のすべての消防ラッパ譜を網羅したという確証はなく、他にもラッパ譜が存在するかもしれないことは、一応確認しておきたい。

そうした限界を踏まえたとうえで整理しておく、残念ながら、公設消防組が組織された1894年の日付をもつラッパ譜を見つける事はできていないが、A（1895）・B（1895）・C（1896～97）が、ほぼ同時代のラッパ譜が存在し、史料的にも価値が高い。それぞれの曲数は、A（23曲）・B（10曲）・C（約60曲）と異なっている。Cの12年後に刊行されたD（1908）は約60曲、その21年後に刊行されたE（1929）は58曲であることから、DとEは年代が離れているものの、曲数に限って言えば近似している。ところが、F（1938）・G（1940）になると曲数が半減する。このことから、A～Cを一つのグループとし、年代の離れたDとEが点在し、FとGとをもう一つのグループとして分類することができる。

次章では、まず、公設消防組設立の時期に近いA～Cのグループを中心に、D・Eを参照しつつ、代表的な楽曲を個別に検証し、その後にA～Eを、F・Gと比較してゆきたい。分析を進めると、個々の楽曲には複数の典拠があり、その変遷にいくつかのパターンがあることが浮かびあがってくる。そして、群馬県で制定された初期の消防ラッパ譜の実態と、消防独自の発展の可能性を経由して、最終的に陸軍のラッパ譜に傾斜してゆくプロセスが明らかになるだろう。

4. 消防ラッパ譜の変遷：1895～1929年

消防ラッパ譜を制定する際に、まず参照されたのは、既に制定されていた軍隊のラッパ譜であろうことは、おおよそ想像がつく（後述）。しかし、消防組には、軍隊にはない消防固有の制度や活動があり、それに対応するラッパの

楽曲は、もちろん軍隊のラッパ譜にはない。その場合、消防オリジナルのラッパ譜が必要となる。つまり、消防ラッパ譜は、軍隊ラッパに由来する曲と、消防オリジナルの曲に大別できる。

ここでは、軍隊のラッパ譜に由来しない楽曲を、とりあえず消防オリジナルのラッパ譜としておくが、その代表的なものに〈知事出場〉、〈警部長出場〉、〈署長出場〉がある³⁵。すべて、県知事、警部長、警察署長という、消防組を監督する者に対する敬礼としてのラッパの楽曲で、演習や点検、巡検等の儀式的な場面（礼式）で吹奏された。

B「喇叭符」（1895）に〈知事出場〉〈警部長出場〉が含まれていないのは、Bが実際の消防組点検で用いた記録なので、おそらく、その場に知事や警部長が来ていなかった（から吹奏する必要なく、記載されなかった）ことを示しているのだろう。

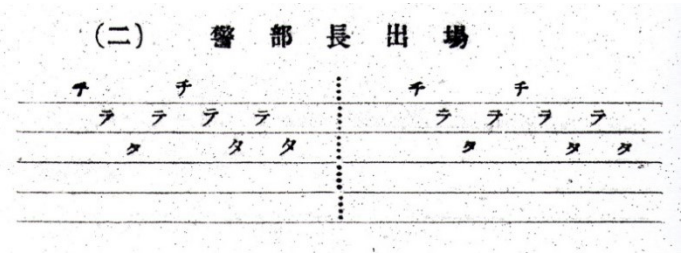
A (1895)	B (1895)	C (1896~97)	D (1908)	E (1929)
知事出場		知事出場	知事出場	知事出場
警部長出場		警部長出場	警務長出場	警部長出場
警察署長出場	署長出場	署長出場	署長出場	署長出場

① 〈警部長出場〉

ところで、A「喇叭ノ譜」（1895）とB「喇叭符」（1895）は文字譜、C「喇叭符號手帳」（1896~97）は五線譜のルールを無視したに手書き譜なので、この3種の楽譜資料だけでは、1895~97年時点の正確なメロディはわからない。

たとえば、A〈警部長出場〉は、「ソ-ミ-ド-ミ-ソ-ミ-ド-ミ-ド」という音型を2度演奏していて、Cの〈警部長出場〉と同じ音の並びであることは判るが、Cの五線譜に記された音符の音価は——8分音符なのか、16分音符なのか？——判読できない。しかし、D「消防ノ栞」（1908）やE「消防喇叭譜音譜」（1929）に同一曲が掲載されているので、それを参照することで、おおよそ推定できる。

つまり、Dの〈警務長出場〉やEの〈警部長出場〉をみると、音の並びはA・Cと同じだが、リズムが「付点8分音符＋16分音符」になっているので、AとCも実際はD・Eのリズムで演奏されただろう。したがって、〈警部長出場〉は、少なくとも1895年から1929年まで同じ旋律で吹奏されていたことになる。



A 〈警部長出場〉（1895）



C 〈警部長出場〉（1896~97）



D 〈警務長出場〉（1908）³⁶



E 〈警部長出場〉（1929）

② 〈知事出場〉

〈知事出場〉も、A (1895)「ソ-ミ-ド-ソ-ド-ミ-ド-ミ-ソ」(×2)とC (1896~97)は音の並びは同じだが³⁷、それだけでは音価を確定できない。したがってD (1908)・E (1929)を参照すれば、正確なメロディが明らかになりそうだが、これは一筋縄ではいかない。

D・Eを参照してみると、2小節目や5小節目のリズムについては、先の〈警部長出場〉と同じで、A・Cも、D・Eのリズムで演奏されていただろう。しかし、A・Cの「ド-ミ-ド-ミ」(第5~8番目の音)が、D・Eでは「ソ-ド-ソ-ド」となっていて一致しない。ただ、D・Eの5小節目は「ド-ミ-ド-ミ」であることから、D・Eの2小節目は誤植で、「ド-ミ-ド-ミ」としたほうが——音楽的に判断しても——自然だろう。つまり、〈知事出場〉も1929年まで同じメロディで吹奏されていたとみてよい。

③ 〈署長出場〉

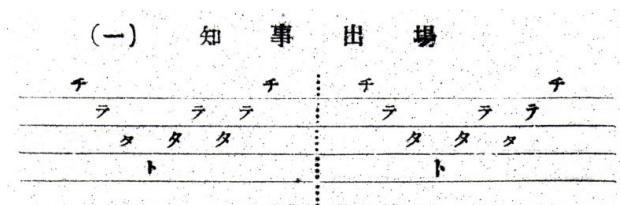
〈署長出場〉は、かなり錯綜している。

A〈警察署長出場〉(1885)の「ソ-ド-ド-ド-ド-ソ-ド-ド-ド-ド-ド」(×2)と、文字譜B〈署長出場〉「トタタートタタター」(1895)、つまり、「ソ-ド-ド-ド-ソ-ド-ド-ド-ド」とは、音の並び方はよく似ているが、音の数が異なっている(Aは11個(×2)、Bは9個)。

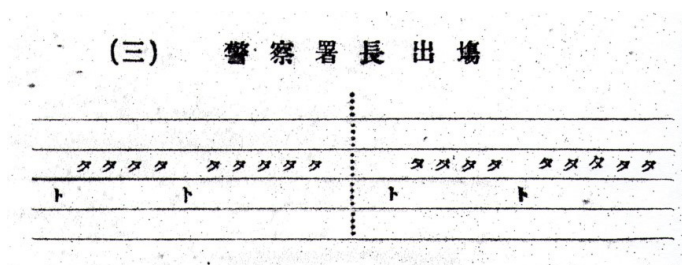
C (1896~97)は、Aの前半部分と一致しているので、Bの音の数が間違っているのだろう。しかし、A・Cは音価がわからないので、D (1908)を参照すると、音価を参考にすることはできるが、6番目の音がA・Cと異なっている(A・Cは「ソ」、Dは「ド」)。

むしろ、A・Cの6番目の音は、E (1929)と一致するので、こちらが正解で、Dの6番目の音が誤りになる。だが、Eは、明らかにA~Dまでの〈署長出場〉とは異なるフレーズ(最後の7つの音)を追加している。

これらのことから総合的に判断すると、1895年から1908年まではDの6番目の音を〔ソ〕に直したメロディを基本としていて、1929年に新たに2小節を追加して、Eになったと推測できる。



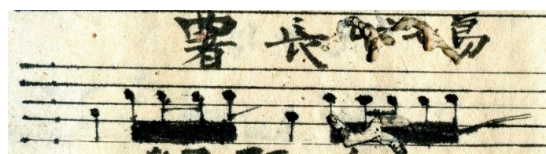
A 〈知事出場〉(1895)



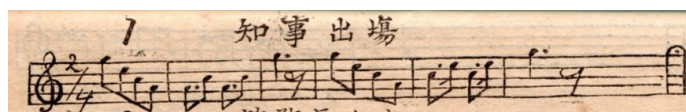
A 〈警察署長出場〉(1895)



C 〈知事出場〉(1896~97)



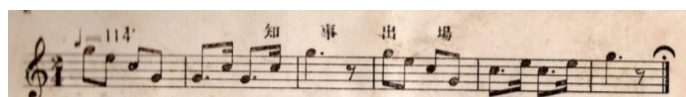
C 〈署長出場〉(1896~97)



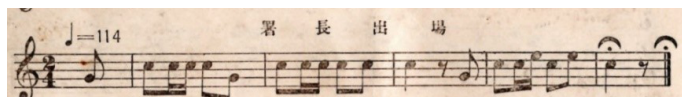
D 〈知事出場〉(1908)



D 〈署長出場〉(1908)



E 〈知事出場〉(1929)



E 〈署長出場〉(1929)

④ 〈組頭呼び〉

軍隊と消防の制度上の違いから、「組頭」や「巡査」を招呼するためのラッパ譜も、消防オリジナルとして作られたようだ。

A (1895)	B (1895)	C (1896~97)	D (1908)	E (1929)
組頭呼び	組頭吹呼	組頭呼ヒ	組頭呼ビ	組頭呼ビ
		巡査呼ヒ	巡査呼ビ	巡査呼ビ

とくに「組頭」は、必ず消防組に設けられているポストなので、A～Eのすべての譜に収録されている。

文字譜のB〈組頭吹呼〉「タタタテテタタタトテチー」(1895)は、「ドードーミミミドードーミミソミソ」なので、A〈組頭呼び〉(1895)とBの音の数は13個で同じだが、10、11番目の2つの音が異なる(Aは「ソード」、Bは「ミソ」)。C〈組頭呼ヒ〉(1896~97)の10、11番目の音は「ソード」で、Aと同じである³⁸。したがってBが誤記と考えられるが、この程度の差異は誤差の範囲内で、A～Cは実質的に同一とみなしても差し支えない。

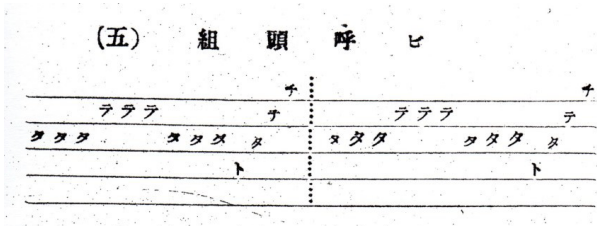
しかし、D〈組頭呼ビ〉(1908)やE〈組頭呼ビ〉(1929)は、A～Cの旋律を原型としているが、より派手に、吹奏

技術的にもかなり難しいメロディにバージョンアップを図ったことが判る。

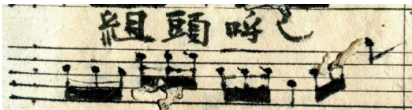
上述したように、〈知事出場〉〈警部長出場〉は、A(1895)からE(1929)まで、変化することはなかったが、〈署長出場〉は1929年から、〈組頭呼び〉は1908年から、より聴きごたえのある——通俗的な言い方をするなら「かっこよい」——表現にアレンジされている。この変化が何を意味するのかは分からないが、県の知事や警部長よりも、各エリアにいる警察署長のほうが、消防組の行事に参加する機会が多いはずなので、演奏頻度が高いことは確かである。もちろん組頭も吹奏頻度は高かったはずである。ひょっとすると、吹きなれた(聴きなれた)ラッパのメロディに対して、意欲的に創意工夫を加えた結果なのかもしれない。

⑤ 〈巡査呼ビ〉

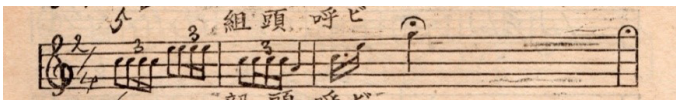
C・D・Eに掲載されている〈巡査呼ビ〉についても同様に、とてもシンプルで信号的なCに対して、D・E〈巡査呼ビ〉は、Cの姿をまったく留めず、ずいぶん華やかなファンファーレ風の楽曲に変貌している。「もっと派手な曲にしてくれないか」と、巡査側から要求があったのではないかと邪推したくなるほどである。



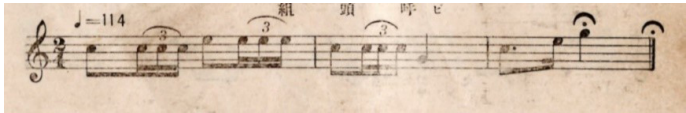
A 〈組頭呼ビ〉(1895)



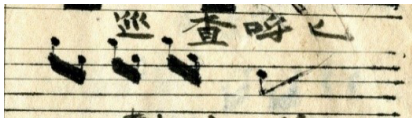
C 〈組頭呼ヒ〉(1896~97)



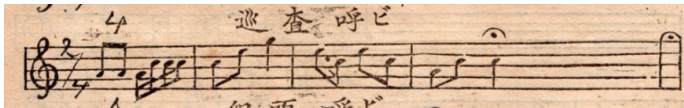
D 〈組頭呼ビ〉(1908)



E 〈組頭呼ビ〉(1929)



C 〈巡査呼ヒ〉(1896~97)



D 〈巡査呼ビ〉(1908)

⑥ 〈〇部頭呼ビ〉

「組頭」と同じように、軍隊には存在しないポストである「部頭」（現在の分団長）を各々呼ぶための〈〇部頭呼ビ〉の招呼のラッパ譜は、A～Cにのみ掲載されており、D（1908）以降には掲載されていない。紙幅の都合で譜例は示さないが、1部から12部までの、それぞれ異なる短いシグナル音である。

A (1895)	B (1895)	C (1896～97)
一部頭呼ビ	一部吹呼	一部頭呼ヒ
二部頭呼ビ	二部吹呼	
三部頭呼ビ	三部吹呼	
四部頭呼ビ	四部吹呼	
五部頭呼ビ		
六部頭呼ビ		六部頭呼ヒ
七部頭呼ビ		七部頭呼ヒ
八部頭呼ビ		八部頭呼ヒ
九部頭呼ビ		九部頭呼ヒ
		拾部頭呼ヒ
		拾壹部頭呼ヒ
		拾貳部呼ヒ

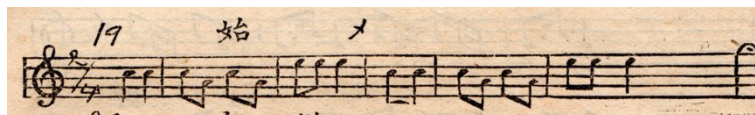
Bは、桐生消防組が当時4部で、Cは荒砥村の消防組が12部で構成されていたことに対応している。ただ、理由はわからないが、Cには、書き写した根岸泰司本人が属していた3部を含む2～5部頭が記されていない（2～5部は記憶していたので、記録する必要はなかったのかもしれない）。音の並びをみると、2つ以上のラッパ譜に掲載されている〈一部〉～〈四部〉、〈六部〉～〈九部〉については、どれもびったり一致している。

ただ、この〈〇部頭呼ビ〉は、1908年以降には掲載されていない。おそらく、D・Eには、新たに数字（1～10）と〈部頭呼ビ〉のラッパ譜が加えられたので、これらを組み合わせて使うことで、〈〇部頭呼ビ〉は不要になって、廃止されたのだろう。

⑦ 〈始メ〉〈止メ〉

敬礼や招呼だけでなく、号音にも消防オリジナルの楽曲がある。

A～Eのすべてに掲載されている〈始メ〉と〈止メ〉は、演習等に用いられた号音のようだが、軍隊のラッパ譜には該当する楽曲はない。〈始メ〉は、A～Eのすべてが同じフレーズを共有しているが、E（1929）には最後の3小節が新たに追加されている。〈止メ〉は、A～Cが同じフレーズだが、DとEはそれとは異なるメロディに変更されている。



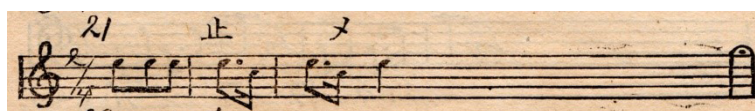
D 〈始メ〉 (1908)
(A～C 〈始メ〉 も同じ)



E 〈始メ〉 (1929)



C 〈止メイ〉 (1896～97)
(A・B 〈止メ〉 も同じ)



D 〈止メ〉 (1908)
(E 〈止メ〉 も同じ)

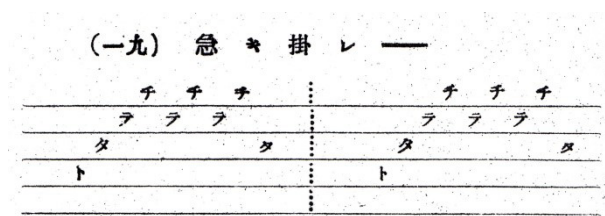
⑧ 〈急ギ掛レ〉

消防のラッパ譜A〈急ギ掛レー〉(1895)とC〈急キ掛レ〉(1896~97)は、来歴が少しユニークである³⁹。『陸海軍喇叭譜』(1885)には〈掛レ〉という類似するタイトルの曲があるが、曲自体は異なっていて、関連はなさそうだ。ところが、1887年に東京で消防ラッパが用いられた時に作成された「喇叭譜号改正ノ件」(1887年2月)という文書に、「別紙」として添えられた楽譜があり⁴⁰、そのなかの〈蒸汽唧筒急キ掛レ〉という楽曲が、A〈急ギ掛レー〉やC〈急キ掛レ〉と同じなのである。どちらのタイトルにも含まれる「急ギ掛レ」という単語の共通性、メロディの共通性から考えると、偶然の一致とは考えにくい。

そもそも、この「喇叭譜号改正ノ件」に添付された楽譜は筆跡が薄く、判読困難であるものの、収録されている全30曲を注意ぶかくチェックしてゆくと、他にも〈東へ掛レ〉、〈西へ掛レ〉、〈南へ掛レ〉、〈北へ掛レ〉が、同一タイトルで、ほぼ同一の楽譜がDとEに掲載されている。しかし、それ以外の20数曲は、群馬の消防ラッパ譜と共通のものはない(似ている曲はある)。

ここまでA~Eに掲載された敬礼(〈知事出場〉、〈警部長出場〉、〈署長出場〉)、招呼(〈組頭呼ビ〉、〈巡査呼ビ〉、〈〇部頭呼ビ〉)、号音(〈始メ〉、〈止メ〉、〈急ギ掛レ〉)などを分析してきたが、A~Cについて言えば、基本的に同じメロディが共有されていることが確認できた。A~Cは、Aは前橋市、Bは桐生市、Cは勢多郡荒砥村で作成されているので、全県域とは言えないまでも、ある程度の範囲をカバーしている。このことは、1890年代に消防ラッパ譜が制定されていて、それが各地に普及していたことの反映と考えるとよいだろう。

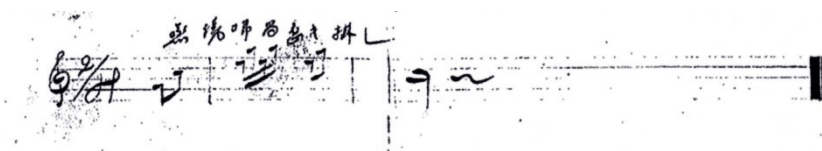
一方、D・Eには、A~Cからそのまま継承された楽曲(例えば〈知事出場〉)も含まれているものの⁴¹、曲によっては華やかにアレンジされた(例えば〈組頭呼ビ〉や〈巡査呼ビ〉)のような曲もある⁴²。また、東京の消防ラッパ譜を参照したとみられる曲もあった(〈急ギ掛レ〉など)。



A 〈急ギ掛レー〉(1895)



C 〈急キ掛レ〉(1896~97)



〈蒸汽唧筒急キ掛レ〉「喇叭譜号改正ノ件」(1887)

5. 消防ラッパ譜の変遷：1938~40年

ところが、1938年に大きな変化がおこる。曲数が半減し、消防オリジナルのラッパ譜の多くが、陸軍のラッパ譜に掲載されている楽曲に差し替えられたのである。すでに紹介したように、『消防喇叭教本』（1938）の「序」で警察部長の石原専一は、新しいラッパ譜を編纂する理由として、消防ラッパ手に「陸軍出身者が多い」ことを挙げていた。もっとも、ラッパ手だけではなく、ラッパ手以外の消防組員にも（在郷軍人など）軍隊出身者は多かっただろう。軍隊のラッパ譜に耳が慣れていただかれらにとって、消防オリジナルのラッパは戸惑うばかりだったに違いない。だが、丁寧に楽曲を見ていくと「陸軍出身者」だけが理由ではないようだ。

敬礼の3曲は、F・G以降は、以下のように変更された。

E (1929)	F (1938)	G (1940)
知事出場	知事（海行カバ）	知事（海行カバ）
警部長出場	警察部長（皇御國2回）	警察部長（皇御國2回）
署長出場	警察署長（皇御國1回）	警察署長（皇御國1回）

タイトルにほとんど変更はないが、1938年以降は「知事」に対して、これまでの消防オリジナルのラッパ譜〈知事出場〉ではなく、既存の陸軍ラッパ譜の〈海行カバ〉⁴³を、「警察部長」に対しては〈皇御國〉⁴⁴を2回、「警察署長」に対しては〈皇御國〉を1回吹奏することになったのである。さらに、それまでの消防ラッパ譜には存在しなかった〈拜神〉と〈一搬葬儀〉というタイトルの曲も加えられ、それぞれ、軍隊のラッパ譜に掲載されている〈國ノ鎮メ〉⁴⁵と〈吹ナス笛〉⁴⁶があてられた。

すべての曲が軍隊のラッパに差し替えられた訳ではない。

たとえば、招呼の〈組頭呼ビ〉〈部頭呼ビ〉は、Fでは〈組頭〉〈部頭〉というタイトルで、別の消防オリジナルの曲に差し替えられている（Gでは〈団長〉〈分団長〉）。また、〈巡查呼ビ〉や〈O部呼ビ〉、号音でも多くの消防オリジナルの曲が廃止された⁴⁷。

F(1938)・G(1940)の「軍隊化」あるいは「陸軍化」は、際立った特徴となっている。注目したいのは、それまでのラッパ譜に存在しなかった〈拜神〉＝〈國ノ鎮メ〉が加えられた点である。軍隊の〈國ノ鎮メ〉は、もともとは靖国神社の祭典で吹奏されていたことから類推すると、消防組（警防団）は地域の護国神社のような場で吹奏されたのだろうか。それまでの消防組にも、そのような役割があったのか、にわかには判断できないが、この曲が追加されたのは「陸軍出身のラッパ手が増えた」という理由だけでは説明できない。『消防喇叭教本』（1938）は1939年の警防団令の前年に刊行されており、地域社会における消防組の役割の変化を敏感に先取りしている。

6. 軍隊のラッパ譜からの転用例

ただし、消防に固有の制度や活動については、当初は消防オリジナルのラッパ譜が要請されたが、消防と軍隊に共通する合図等については、初期の段階から軍隊のラッパ譜が参照されている。たとえば、1885年に日本で初めて制定された『陸海軍喇叭譜』（1885）に掲載されたラッパ譜〈君が代〉は、A(1895)・B(1895)には収録されていないが、C(1896)以降は、すべての消防ラッパ譜にそのまま掲載されている。

そのまま消防で用いられた曲は号音に多く、たとえば、軍隊の〈其場二休メ〉や〈前進〉などがそれにあたる。



G 〈知事〉（海行カバ）(1940)



G 〈拜神〉（國ノ鎮メ）(1940)



G 〈警察部長〉（皇御國）(1940)

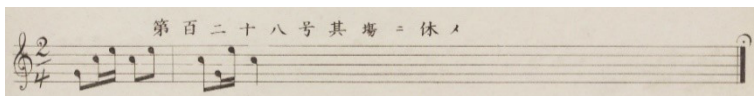


G 〈一搬葬儀〉（吹ナス笛）(1940)

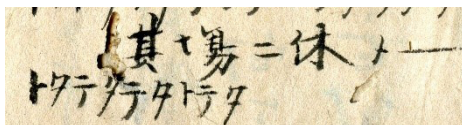
⑨ 〈其場二休メ〉

『陸海軍喇叭譜』（1885）の〈其場二休メ〉は、文字譜のC（1896~97）と音の並びが一致し、五線譜のD（1908）・E（1929）と（フェルマータの有無を除いて）

まったく同一なので、C・D・Eの〈其場二休メ〉が『陸海軍喇叭譜』（1885）に由来するラッパ譜であることは間違いない。



〈其場二休メ〉『陸海軍喇叭譜』（1885）



C 〈其場二休メ〉（1896~97）
「ソ-ド-ミ-ド-ミ-ド-ソ-ミ-ド」



E 〈其場二休メ〉（1929）

⑩ 〈前進〉

『陸海軍喇叭譜』（1885）の〈前進〉も、C・D・Eに掲載されている。C〈前へ〉（1896~97）は、2回繰り返すと『陸海軍喇叭譜』〈前進〉と音の並びは一致する。D〈前進メ〉（1908）も、やはり『陸海軍喇叭譜』と同じで、これはE（1929）にも継承された。したがって、消防組が前進するときには、少なくとも1929年ごろまで

軍隊ラッパ譜の〈前進〉が吹奏されていた。

これ以外にも、軍隊のラッパ譜の曲を使っている楽曲は多いが、軍隊のラッパ譜から採用した曲が、その後に改正された場合には、その改正されたバージョンが消防ラッパ譜に収録されている。



〈前進〉『陸海軍喇叭譜』（1885）



C 〈前へ〉（1896~97）



D 〈前進メ〉（1908）

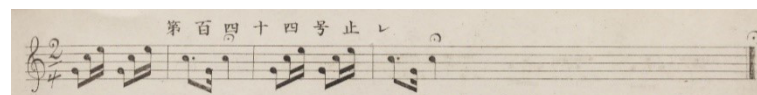
① 〈止レ〉

軍隊ラッパ譜の改正に対応して消防ラッパが変化する例として、〈止レ〉を比較してみよう。

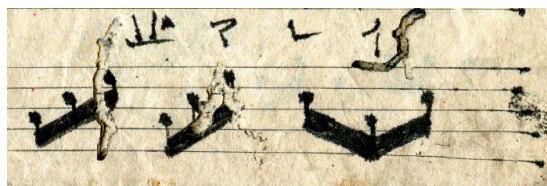
〈止レ〉も初出は『陸海軍喇叭譜』（1885）で、群馬のC〈止マレイ〉（1896～97）は、音の並びは『陸海軍喇叭譜』の〈止レ〉と一致するため、Cは軍隊のラッパ譜に由来することが判る。これと同じ曲が、D（1908）やE（1929）にも引き継がれているので、この間の群馬の消防の〈止レ〉

は、ずっと〈止レ〉（1885）が演奏され続けたことになる。

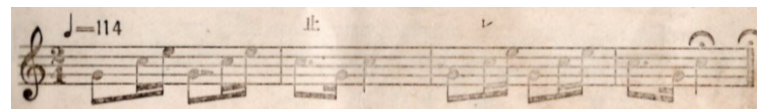
もちろん、軍隊でも同じ〈止レ〉が演奏されていたが、1931年に刊行された『陸軍喇叭譜』では、それまでの〈止レ〉を、明らかにシンプルにアレンジした——それゆえ、吹奏することが簡単な——バージョン〈止レ〉（1931）が掲載されている。群馬のF（1938）は、この改正された〈止レ〉（1931）を採用し、G（1940）にも継承された。



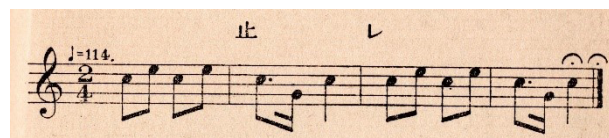
〈止レ〉『陸海軍喇叭譜』（1885）



C 〈止マレイ〉（1896～97）



E 〈止レ〉（1929）



〈止レ〉『陸軍喇叭譜』（1931）



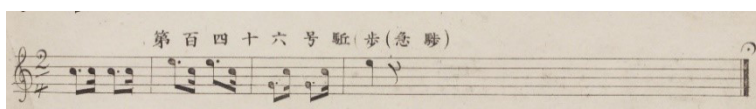
G 〈止レ〉（1940）

⑫ 〈駢歩〉

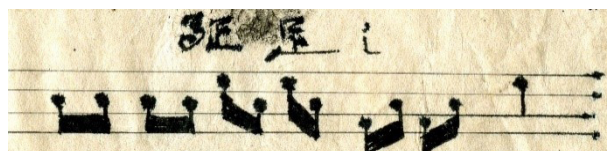
しかしながら、軍隊のラッパ譜が改正されても、消防ラッパ譜は以前のバージョンを継続して用いることもある。『陸海軍喇叭譜』（1885）の〈駢歩〉と、群馬のC〈駢足し〉（1896~97）は、音の並びが同じなので、Cは『陸海軍喇叭譜』（1885）に由来することが判るが、1903年の『陸軍喇叭譜』では、16分音符（1小節目から2個、3小節目から1個）を削除し——連続するタンギングが難しくなったのだろう——、簡単に吹奏できるメロディ〈駢歩〉

（1903）に改められた。それに対応するように、群馬のD〈駢足ノ譜〉（1908）は、改正バージョン〈駢歩〉（1903）を採用している。

その後、『陸軍喇叭譜』では、1921年になって、最後の3つの音を「ソドミ」から「ドミソ」に上方シフトしたバージョン〈駢歩〉（1921）に改められた。しかし、その8年後に刊行される群馬のE（1929）は、〈駢歩〉（1921）に変更すべきところなのだが、Eには、D〈駢足ノ譜〉（1908）がまだ掲載されている。



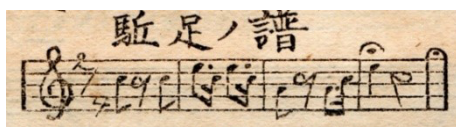
〈駢歩〉『陸海軍喇叭譜』（1885）



C 〈駢足し〉（1896~97）



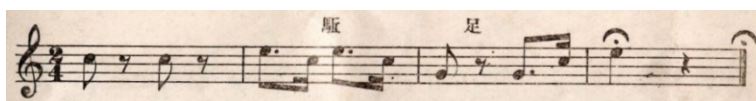
〈駢歩〉『陸軍喇叭譜』（1903）



D 〈駢足ノ譜〉（1908）



〈駢歩〉『陸軍喇叭譜』（1921）



E 〈駢足〉（1929）

⑬ 〈出火信号〉

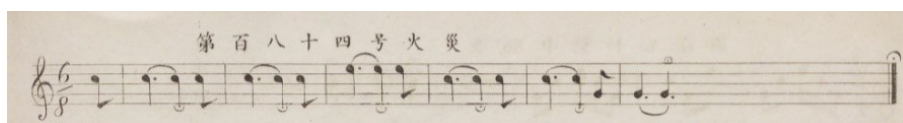
〈駈歩〉と同じように、群馬の消防ラッパ譜が軍隊の最新バージョンを使用しない例として、〈出火信号〉がある。1小節毎のフェルマータ記号が特徴的な『陸海軍喇叭譜』〈火災〉(1885)は、1903年に刊行された『陸軍喇叭譜』では〈火災〉(1903)に変更されている。それに対応して、群馬のDは〈出火信号喇叭〉(1908)として、〈火災〉(1903)と同じ楽譜を掲載している。

ところが、1910年に刊行された『陸軍喇叭譜』では、〈火災〉(1903)の前半4小節がすべてカットされて〈火災〉(1910)となり、さらに1921年の『陸軍喇叭譜』では、すべての3連符をシンプルなリズムに変更して、より簡単

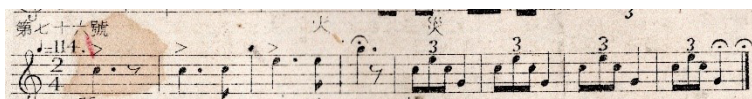
なバージョン〈火災〉(1921)になった。

しかしながら、群馬県のE〈出火信号〉(1929)は、軍隊の〈火災〉(1910)・〈火災〉(1921)のどちらでもなく、吹奏が難しいはずのD〈出火信号〉(1908)——つまり、一昔前の軍隊ラッパ譜の〈火災〉(1903)——の楽譜を相変わらず使っている。

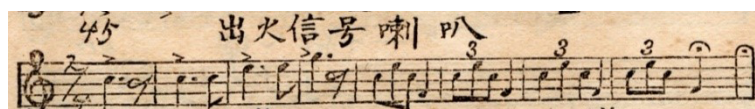
どうやらE(1929)は、1921年に改正された『陸軍喇叭譜』にはあまり関心がなく、群馬県でそれまで使用していた消防ラッパ譜D(1908)を継承することに専ら熱心であるかのようである。ちなみに、後の陸軍では、驚くほど簡素化した〈火災〉(1931)を新たに制定している。



〈火災〉『陸海軍喇叭譜』(1885)



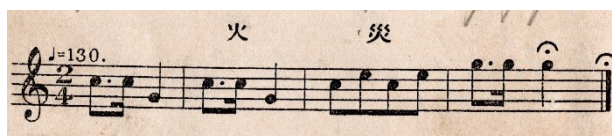
〈火災〉『陸軍喇叭譜』(1903)



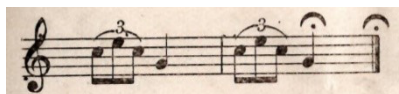
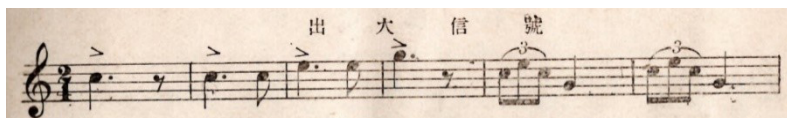
D 〈出火信号喇叭〉(1908)



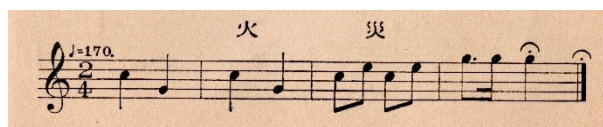
〈火災〉『陸軍喇叭譜』(1910)



〈火災〉『陸軍喇叭譜』(1921)



E 〈出火信号〉(1929)



〈火災〉『陸軍喇叭譜』(1931)

7. 1895~97年の消防ラッパ譜は何を典拠としたのか

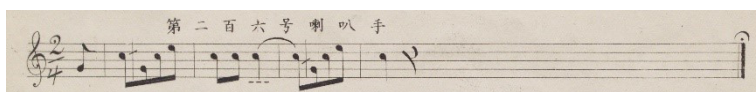
⑭ 〈喇叭呼ビ〉

このように、消防ラッパ譜には、消防のためにオリジナルとしてつくられたと思われる楽曲、軍隊のラッパ譜に由来する楽曲から構成され、後者にはその時々で改正された楽曲、あるいは改正に対応しない昔のままの楽曲が、多層的に混在していることになる。だが、さらに個々の楽曲に即して分析する作業を進めていくと、消防ラッパのA・Cには、どれにも分類できない、出自不明の曲がいくつか存在することに気づく。

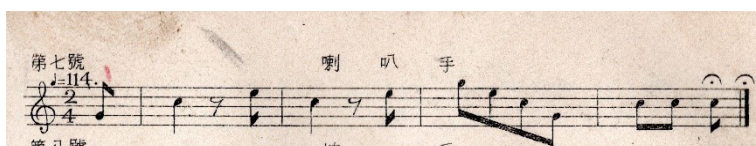
たとえば、ラッパ手を招呼するための楽曲は、軍隊のラッパ譜では『陸海軍喇叭譜』（1885）に掲載されている〈喇叭手〉がある。その後、1903年の『陸軍喇叭譜』では、少し雰囲気は残しているが別の曲の〈喇叭手〉（1903）になっている。〈喇叭〉（1885）は、シンコペーションが難しかったのだろうか（群馬のD（1908）には、〈喇叭〉（1903）が載っている）。

陸軍でも『陸軍喇叭譜』（1910）は、この〈喇叭手〉（1903）を引き継いだ。『陸軍喇叭譜』（1921）では、アウフタクトの音が省かれ、1~2小節の8分休符に「ド」の音が挿入されたメロディ〈喇叭手〉（1921）に修正されている。当時のラッパ手にとって、裏拍から入ることが難しかったと思われる（群馬のE（1929）は、やはり〈喇叭手〉（1921）の存在を無視して、依然D（1908）を使っているが、F・Gになってようやく〈喇叭手〉（1921）が採用された）。

ところが、実は、群馬の1890年代の2つの楽譜、A（1895）とC（1896~97）にも〈喇叭呼ビ〉が収録されている。双方の譜例をみると、Aは「ドミドミ」（×2）で、Cは最後の「ド」の音符が一つ多く、厳密に言えば異なっているが、同じ長3度のモチーフなので、同一曲とみなしてよいだろう。つまり、『陸海軍喇叭譜』（1885）に〈喇叭手〉があるにもかかわらず、A・Cはそれを無視するかのように、用いない。



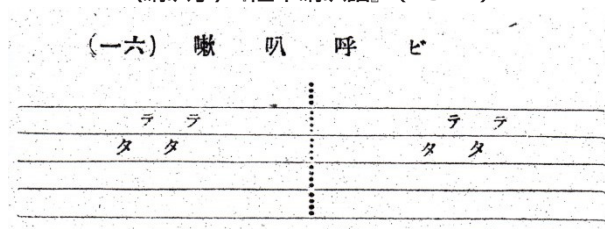
〈喇叭手〉『陸海軍喇叭譜』（1885）



〈喇叭手〉『陸軍喇叭譜』（1903）



〈喇叭手〉『陸軍喇叭譜』（1921）



A 〈喇叭呼ビ〉（1895）



C 〈喇叭呼ビ〉（1896~97）

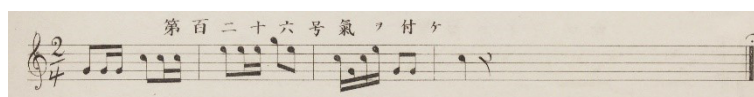
⑮ 〈気ヲ付ケ〉

『陸海軍喇叭譜』（1885）に、該当曲が存在するにもかかわらず、1890年代の群馬の消防ラッパ譜がそれを参照をしない例は、他に〈気ヲ付ケ〉がある。

詳細な説明は省くが、軍隊ラッパとしての〈気ヲ付ケ〉（1885）は、1921年に、3小節目（1拍目）が簡略化されたバージョン〈気ヲ著ケ〉（1921）に改正され、群馬では、D・Eに〈気ヲ付ケ〉（1885）が、F・Gには〈気ヲ著ケ〉（1921）が掲載される。

しかし、C（1896~97）に掲載されている〈気ヲ付ケ〉は、4度（「ソ」から「ド」に）上行するところをはろうじて同じだが、他は異なっていて同一曲とは思えない。

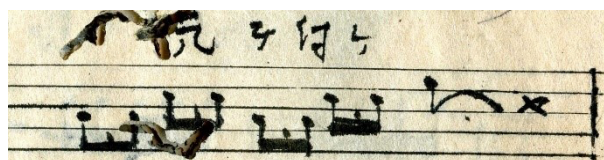
『陸海軍喇叭譜』（1885）に掲載されていない曲が、1895~97年の群馬県の消防ラッパ譜に掲載されている場合、素直に考えれば、最初に紹介した〈知事出場〉や〈警部長出場〉のように、消防オリジナルの曲と解釈できるかもしれない。しかし、該当する曲がない〈知事出場〉〈警部長出場〉ならともかく、〈喇叭手呼び〉や〈気ヲ付ケ〉は軍隊のラッパ譜にも掲載されているのにもかかわらず、あえてオリジナルを創作するのは不自然である。可能性として、『陸海軍喇叭譜』（1885）以外の典拠（楽譜）があると考えたほうが、自然ではないだろうか。この問題を解決する手がかりを与えてくれるのは、Cに掲載されている複数の行進曲である。



〈気ヲ付ケ〉『陸海軍喇叭譜』（1885）



〈気ヲ著ケ〉『陸軍喇叭譜』（1921）



C 〈気ヲ付ケ〉（1896~97）

8. C『喇叭符號手帳』（1896~97）の行進曲はどこからやってきたか？

『陸海軍喇叭譜』（1885）には、行進曲として〈徒步行進〉⁴⁸、〈乗馬行進〉、〈登坂〉、〈帰宮行進〉、〈葬礼途上〉、〈駢步行進〉の6曲が収録されている。

それに対して、群馬のC『喇叭符號手帳』（1896~97）には、タイトル不明の1曲（曲の長さから判断して、おそらく行進曲）を除き、9曲の行進曲が収録されている。

〈駆足〉〈新丸ス〉〈陸軍〉〈新坂丸ス〉
〈中丸ス〉〈旧丸ス〉〈旧丸ス口〉〈坂丸ス〉〈学丸ス〉

この9曲のうち、〈駆足〉⁴⁹、〈新丸ス〉と〈陸軍〉⁵⁰、〈新坂丸ス〉⁵¹の4曲は、『陸海軍喇叭譜』（1885）に同一曲が掲載されているが、残りの5曲は『陸海軍喇叭譜』に収録されておらず、来歴がわからない。単純な信号ならともかく、「行進曲」なので、群馬でローカルに作られた曲とは思えない。

可能性としては、1897年までに作られたラッパ譜が別にあり、それを典拠として、これら5曲がC（1896~97）

に転載されたと考えたほうがよさそうだ。さらに、Cに収録されている〈坂丸ス〉と〈新坂丸ス〉という2つの行進曲に注目すると、その典拠となった楽曲（譜）の年代をさらに正確に絞り込むことができる。

C〈新坂丸ス〉（1896~97）は、『陸海軍喇叭譜』の行進曲〈登坂〉（1885）と同一曲である。この〈新坂丸ス〉のタイトルにある「新」が、「新しい」を意味するのなら、C〈坂丸ス〉（1896~97）は〈登坂〉（1885）より前から存在していた古い行進曲ということになる。すなわち、1885年以前から存在しているラッパ譜に由来する「古い登坂行進曲」=〈坂丸ス〉と、1885年に新しくできた〈登坂〉=〈新坂丸ス〉が、Cと一緒に収録されたと理解するのが最も合理的である。

〈坂丸ス〉と〈新坂丸ス〉の対応関係は、〈旧丸ス〉と〈新丸ス〉にも当てはめることができる。つまり、〈新丸ス〉は『陸海軍喇叭譜』の〈徒步行進〉（1885）と同じ曲なので、常識的に考えれば〈旧丸ス〉も、1885年以前にすでに存在していた古い行進曲ということになる。

ところで、Cに掲載されている行進曲のタイトルに頻出する「丸ス」とは、おそらく「マルス」、つまりフランス

語の marche（行進曲）のことであり、陸軍においては1885年までフランスのラッパ譜を使用していたことを直ちに想起させる。行進曲を「マルス」と呼ぶ慣習は、ローカルな消防組にも伝わっていた。

そうすると、1885年以前から存在した〈坂丸ス〉や〈旧丸ス〉は、陸軍が明治初年から1885年まで使っていたフランスのラッパ譜に起源を求めるところができるかもしれない。しかし、日本で用いられたフランスのラッパ譜は、本論の前半で述べた幕末のフランスのラッパ譜に『喇叭符号』（1867）の他に、松代藩学政局の『法国歩兵演範 散兵部』（1869）に収録されている「散兵螺笛譜」が現存するものの、この2冊にCの5つの行進曲は含まれていない。

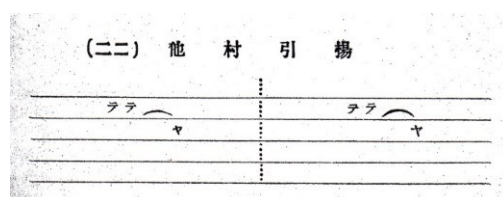
ただ、改めてこの2冊を検分してみると、『喇叭符号』（1867）に収録されている〈喇叭ヲ呼〉の冒頭2小節は、

前述したA・Cの〈喇叭呼ビ〉（80頁参照）の8つの8分音符モチーフと同じである⁵²。つまり、A・C〈喇叭呼ビ〉は、消防のオリジナルではなく、フランスのラッパ譜に由来しているように見える。

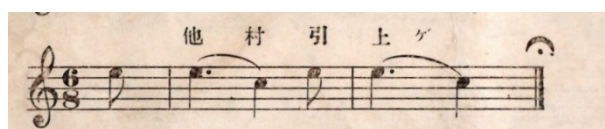
また、〈他村引揚〉としてA～Eに掲載されている楽曲も、やはり『陸海軍喇叭譜』（1885）には掲載されていないので、消防オリジナル譜のようだが、「散兵螺笛譜」に掲載されている〈右側向面変換〉や〈左側向面変換〉の冒頭2小節のフレーズと一致する⁵³。こちらは、タイトルが異なるので、偶然の一致にもみえるが、この6拍子の珍しいフレーズが、まったく無関係と考えるほうが不自然のように思える。〈右側向面変換〉のフレーズを部分的に借りてきて、〈他村引揚〉として用いたのだろう。



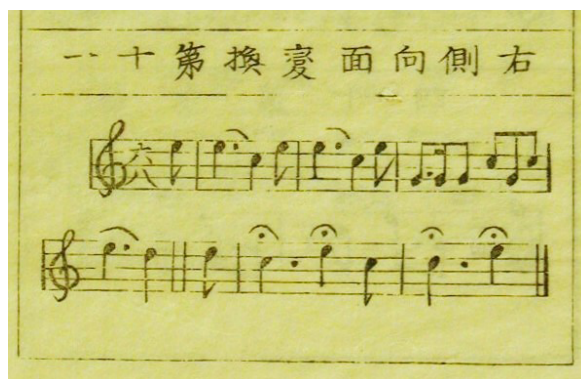
〈喇叭ヲ呼〉『喇叭符号』（1867）



A 〈他村引揚〉（1895）



E 〈他村引上ゲ〉（1929）



〈右側向面変換〉「散兵螺笛譜」（1869）

9. フランス起源の行進曲

⑩ 〈中丸ス〉〈坂丸ス〉〈旧丸スロ〉

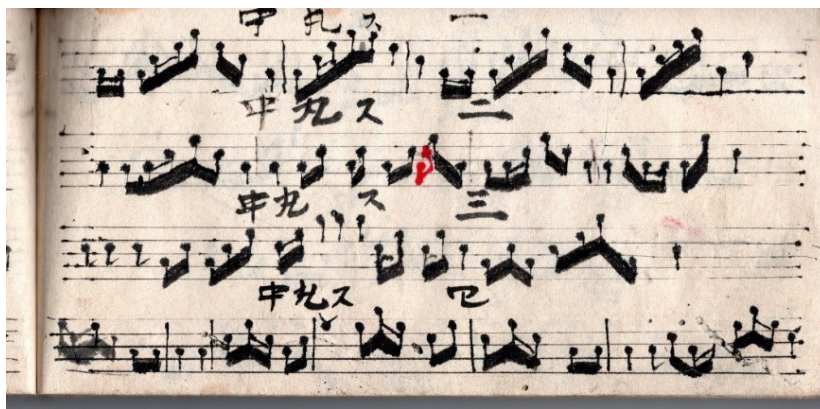
群馬の1890年代の消防ラッパ譜が幕末のフランスのラッパ譜に由来する可能性があるとはいえ、幕末維新期に刊行された『喇叭符号』や「散兵螺笛譜」を原典として直接参照したとは考えにくい。そこで、『陸海軍喇叭譜』

(1885)の制定前に、陸軍で流通していたフランス・スタイルのラッパ譜を調査したいところだが、その時期の資料はほとんど残っていない⁵⁴。しかし、フランス国立図書館(Bibliothèque nationale de France)(以下BnF)の電子図書館ガリカ(Gallica)を、「clairon」等で検索をすると、フランスで用いられていたラッパ譜、歩兵操典の類が何冊かヒットする。とくに1860年代から1880年代前半までのラッパ譜の閲覧を進めてゆくと、当然のことながら、先の〈喇叭手呼び〉や〈他村引揚〉の参照元となったと思われる楽曲を、簡単に発見することができる⁵⁵。

行進曲については、1869年にパリで刊行された、

*Méthode de clairon d'ordonnance*に掲載されている「*Vingt pas accélérés originaux*」という行進曲が、来歴の分からないCの5つの行進曲のなかの〈中丸ス〉(1896~97)とよく似ていることに気がつく。

C〈中丸ス〉(1896~97)は、1節毎に番号が振られていて25番まである長い行進曲である。すでに何度か説明したように、Cに記されている音符の音価は信用できないものの、音の並びを比較してみると、〈中丸ス〉の1~4番が、ちょうど「*Vingt pas accélérés originaux*」(1869)の1~2番とほぼ一致することがわかる。しかし、〈中丸ス〉の5番以降と、「*Vingt pas accélérés originaux*」の3番以降とはほとんど一致しないので、この*Méthode de clairon d'ordonnance*は直接の典拠ではないようだ。私が調べた限りでは、BnFの他のラッパ譜に、これと同じような行進曲を見つけることはできなかったが⁵⁶、どこかに原典が存在する可能性はある。あるいは、日本で補われた可能性もある。



C 〈中丸ス〉 1~4番 (1896~97)



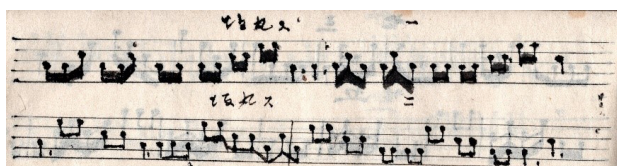
« Vingt pas accélérés originaux »
Méthode de clairon d'ordonnance, 1869.

また、C〈坂丸ス〉(1896~97)も、——楽譜が読める者にとっては、信じがたいかもしれないが——フランスのラッパ譜の「Le pas de charge」という楽曲と一致している⁵⁷。他にも、C〈旧丸ス〉9~10番が「Marches pour clairon seul」の第1行進(16小節)と⁵⁸、C〈旧丸スロ〉「壱」が「Marche」と一致している⁵⁹。〈旧丸ス〉、〈旧丸スロ〉とも部分的に一致しているだけなので、やはり、原典が別に存在するか、日本で補われたかのどちらかであろう。

フランスのラッパ譜も日本の陸軍が用いたフランス・スタイルのラッパ譜も、現存する資料が十分にあるわけではないため、これ以上のことは何とも言えないが⁶⁰、群

馬で用いられたラッパ譜の〈喇叭手呼ヒ〉や〈他村引揚〉、行進曲〈中丸ス〉、〈坂丸ス〉、〈旧丸スロ〉、〈旧丸ス〉(1896~97)等は、1885年まで用いられていたフランス・スタイルの陸軍のラッパ譜に由来していることは間違いない⁶¹。

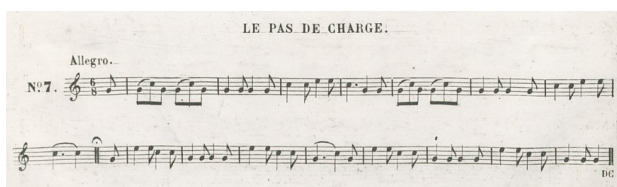
ちなみに、本稿の前半で紹介した1895年4月14日の桐生消防組における点検で鳴り響いた「各部集レノ令但喇叭」は、おそらくラッパ譜のA〈集レー〉のメロディで、つまりこれは、フランスのラッパ譜「Garde a vous」が原典である⁶²。



C〈坂丸ス〉(1896~97)

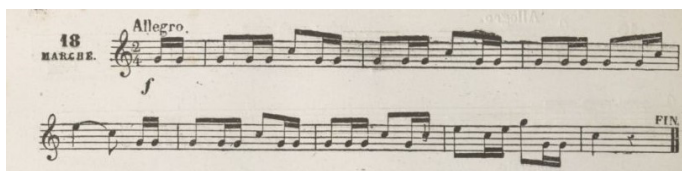


C〈旧丸スロ〉(1896~97)



« Le pas de charge »

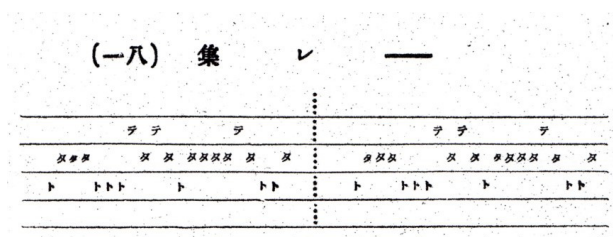
Petite Méthode de clairon d'ordonnance, 1863.



« Marche » *Méthode de clairon d'ordonnance, 1869.*



C〈旧丸ス〉 9~10番 (1896~97)



A〈集レー〉(1895)



« Marches pour clairon seul »

Règlement du 12 juin 1875 sur les manoeuvres de l'infanterie, 1877.



« Garde a vous » *École des sonneries de manoeuvre, 1864.*

10. 洋楽受容としてのラッパ

本稿が対象とした7種の消防ラッパ譜、および軍隊のラッパ譜に収録された曲のすべてについては言及できなかったが、以上の調査・分析から明らかになったこと（明らかにならなかったこと）を、簡単にまとめておく。

群馬県では、1894年に公設消防組が設置されから、それほど遠くない時期に——おそくとも1895年には——消防ラッパ譜が制定されていたとみられる。文献資料やC『喇叭符號手帳』（1896～97）によると、初期の段階から組織的な講習会が実施されており、他県に比べてその普及率は高かったように思われる。

近代群馬で鳴り響いていたラッパの音楽を、7種類のラッパ譜（1895～97年（A～C）、1908年（D）と1929年（E）、1938年と1940年（FとG））の分析によって分類すると、消防組のために作られたオリジナル曲と、軍隊のラッパ譜から転用した曲に大別できる。前者には、東京の消防ラッパ譜を参考にしたと思われる曲も含まれているが、それ以外の〈知事出場〉等がどこで誰が作曲したのか、現時点ではわからない（群馬のオリジナルかもしれない）。後者の軍隊ラッパ譜からの転用例は、1885年以前の、フランス・スタイルのラッパ譜に由来するものと、1885年の『陸海軍喇叭譜』（と、それ以降、たびたび改正される『陸軍喇叭譜』）に由来するものとに分けられる。群馬の消防ラッパ譜は、こうしたさまざまな由来を持つ楽曲によって構成されており、時代によってそのバランスは異なっている（巻末の曲目一覧を参照）。

ラッパ譜のA「喇叭ノ符」（1895）・B「喇叭符」（1895）には『陸海軍喇叭譜』（1885）に由来する曲がまったく存在せず、C『喇叭符號手帳』（1896～97）には十数曲含まれるものの割合として少ないのは、消防組が軍隊で用いられているラッパ譜を使うことを意図的に避けた結果のように見える⁶³。事実、過去に東京や福岡では、消防でラッパを用いる際に、軍隊と同じのものを使ってよいのか議論されていた⁶⁴。その結果だろうか、もはや軍隊では使われていない1885年以前のフランスのラッパ譜が、1890年代のAやCに含まれた。フランスのラッパ譜が荒砥村のラッパ手によって——写譜ではなく——採譜されているのは、そこに楽譜があったからではなく、かれの近くにそれらを吹奏できる人物がいたことを示している。確たる証拠はないが、消防組の操練を指導していた警察には1885年以前のラッパ譜が伝承されていたのかもしれない⁶⁵。

しかし、D『消防の栞』（1908）以降になると、『陸軍喇叭譜』に収録された曲を転用する例が徐々に増えてくる。

それでも〈知事出場〉、〈警部長出場〉、〈署長出場〉、〈組頭呼ビ〉など、消防に固有の制度や活動に対応するラッパ譜は継承され、全体のなかで一定の割合を占めている。それどころか、改正される軍隊ラッパ譜を無視して、昔のバージョンを使ったり（E〈駈足〉（1929）、E〈出火信号〉（1929）など）、吹奏が難しくとも、より華やかにアレンジする（D〈組頭呼ビ〉（1908）、D〈巡査呼ビ〉（1908）、E〈署長出場〉（1929））など、独自の展開を見せようとしていた。とくに、E『消防喇叭音譜』（1929）は、ささやかではあるが、群馬の消防ラッパ史のピークといえよう。ところが、1938年に、曲数が半減し、ごくわずかな数曲を除いて、ほとんどが陸軍のラッパ譜と同じ楽曲が用いられるようになる。

1930年頃の陸軍の事情について補足しておく、その頃、ラッパ手の教育時間が削減されたことにより、1930年の改正では、ラッパ譜を大幅に簡略化せざるを得なくなった⁶⁶。その結果、『消防喇叭音譜』（1929）にみられた小さな発展の芽を摘むかのように、陸軍の簡単なラッパ譜が消防組を席巻したことになる。

消防ラッパが、軍隊ラッパと同じであるかのようなイメージがあるとするなら、それは1938年以降の消防ラッパ譜に依るところが大きく、それ以前の実態はすっかり忘れ去られてしまった。逆に、消防ラッパ譜が、軍隊のラッパ譜とは全く異なる別物であるかのような理解も正しくない。初期のラッパ譜は、たしかに『陸海軍喇叭譜』（1885）を避けており、消防オリジナルのラッパ譜も制定されていたようではある。しかし、1885年以前の軍隊の（フランス・スタイルの）ラッパ譜の影響は無視できない。

本稿は対象を群馬県に限定したので、ここで明らかになったことが、他の都道府県にそのまま適用できるかどうかは、まだわからない。すでに調査をおこなった長野県の消防組と比較するかぎりでは、群馬県のラッパ譜はきわめて先進的であるが、それが他の都道府県と比べても群を抜いているのか、それとも類例があるのかについては、今後の課題である⁶⁷。

洋楽受容史としてみた場合、五線譜もどきのA、文字譜のB、手書き譜のCは、1890年代における一般の人々の楽譜リテラシーの実態を示す点でも、重要である。ヨーロッパの金管楽器であるビューグル（ラッパ）演奏は、まぎれもなくヨーロッパ音楽の受容なのだが、消防組のラッパ手たちにとって、けっして身近な音楽ではなかっただろう。かれら——1895年に20歳とするなら、1875年生まれ——が小学生の頃、唱歌教育はまだ十分に普及していなかった。むしろ、ラッパ吹奏が初めての「洋楽」体験で

¹ （奥中 2017）

² *Field Exercises & Evolutions of Infantry*, London, 1861. に同じ五線譜の楽譜が掲載されている。同じ楽譜は『英國鼓笛之譜』（出版年不明）、『英國尾栓銃練兵新式』（1869）、『英國銃隊練法千八百七十年式』（1871）にも掲載されている。

³ 中村理平は、P. Clodomir, *Méthode complète pour clairon*, Paris, 1865. が原典ではないかと推測している（中村 1993：59）。

⁴ 筆者の手元には近衛歩兵第一連隊の『法朗西諸兵科 喇叭綴譜口授書』（1883）というフランス語が多用された楽典の教科書があるが、ここには具体的なラッパ譜は含まれていない。また『騎兵操典』（1883）の「教練基礎」には騎兵用のラッパ譜（おそらくフランス・スタイルで、山口常光によると日本の騎兵ラッパに関する「唯一の資料」（山口 1972：2））が収録されているが、本論で扱う楽曲とは重複しない。また、中村理平は『陸海軍喇叭譜』制定までの間に「陸海軍は次第に日本陸海軍専用の新曲を創作」ともいうが、具体的な曲目を示していない（中村 1993：60）。

⁵ （塚原 1993：85）、『楽譜御制定外2廉献言の件鎮守府上申他2件』（JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C09113528900、明治12年 公文類纂 後編 巻9 本省公文 兵務部2（防衛省防衛研究所））

あったにちがいない。それでも1890年代末の群馬には、フランスに由来する行進曲を吹くラッパ手が存在し、「集レ」では« Garde a vous »が鳴り響いた。それは『ここに泉あり』の約半世紀も前の話である。

参考文献

奥中康人「長野県における消防ラッパの普及と変容」『静岡文化芸術大学研究紀要』第17巻（2017年3月）65~85。
塚原康子『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』（多賀出版 1993）
塚原康子「軍楽隊と戦前の大衆音楽」阿部勘一他『プラスバンドの社会史 軍楽隊から歌伴へ』（青弓社 2001）84~124。
中澤重雄「消防喇叭に就て」『大日本消防』（1938年12月）29~31。
中村理平『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—』（刀水書房 1993）
山口常光『喇叭指導指針』（1937）
山口常光『陸軍軍楽隊史』（1968）
山口常光『日本ラッパ史』（1972）

⁶ 5種の軍隊ラッパ譜は以下の通り。
『陸海軍喇叭譜』（1885）、国立公文書館蔵本（ヨ390-0031）。1885年達乙第154号に基づく。
『陸軍喇叭譜』（武揚堂 1903）、筆者所蔵。1902年12月24日改正（陸達126号）。これにより1885年達乙第154号（『陸海軍喇叭譜』（1885））は廃止。
また、海軍のラッパ譜と分離する。
『陸軍喇叭譜』（小林又七 1910）、国立国会図書館近代デジタルライブラリー。1910年6月4日改正（陸普2462号）。
『陸軍喇叭譜』（武揚堂 1921）、筆者所蔵。1921年10月1日改正（陸普4305号）。
『陸軍喇叭譜』（東京武揚堂 1931）、筆者所蔵。1930年12月26日改正（陸普5654号）。
⁷ 明治13年11月、陸軍省が警視局消防隊の楽譜とラッパ（楽器）に対し「警視消防譜之外二十七個ノ譜号ハ陸軍処用ノ譜ト略同一二有之且喇叭ハ陸軍歩兵用ノ品ヲ只其槿花状之部分ヲ切断シタルモノト同一ニテ其音響差シタル違ヒ此無」とクレームをつけた（「警視局より消防隊喇叭使用の儀に付照会の件」JACAR: C09070235000、明治13年 第一号審按 40 從10月至12月（防衛省防衛研究所））。しかし、警視局消防隊側が問題点を改めたことによって認められた（「警視局照会の消防隊喇叭使用の件」JACAR: C09070246700、明治13年 第1号審按 40 從10月至12月（防衛省防衛研究所））。
⁸ 「消防組での火災の際の合図、消防夫の召集などにラッパを使おうとした。しかし軍器は一切民間では使用を禁じているということから、政府の許可を求めようと、当時の岸良俊介県令は、「陸海軍々用器ト異ルモノ或ハ兒童玩弄物トシテノ 喇叭ハ使用差支無之哉」と伺った。大山陸軍卿はこれに対して「伺之趣其形状及音律ガ軍用品ト異ルモノニ候ヘバ使用差支無之儀ト可相心得事」と司令した。」（『福岡県警察史 明治大正編』（1978）846）。アジア歴史資料センターには「福岡県消防喇叭の件」（1883年9月3日）（JACAR: C09071167500、明治16年 1号審按 5 從9月至同10月（防衛省防衛研究所））という文書もある。
⁹ 「明治十八年ろ組の消防手が喇叭の吹奏を取得し、消防独特の楽譜にて之が吹奏を始めてから前記の鳴器を排して喇叭を使用する様になつた」『岐阜消防沿革史』（1939）182。
¹⁰ 「喇叭譜号改正の件」（JACAR: C03030186500、明治20年2月「壹大日記 壹」（防衛省防衛研究所））には、判読が困難だが、30曲の楽譜が添付されている。
¹¹ （中澤 1938）
¹² 中略部分には、当時制定されたラッパ譜として56種のタイトルが記されているが、その56種は後述する1890年代のラッパ譜とはあまり一致せず、1929年に刊行された『消防喇叭音譜』（前橋市）とほぼ一致する。どうやら、中澤は、1890年代に制定されたラッパ譜が1929年まで一貫して用いられていたと誤認したようだ。つまり、1938年の時点で、40数年前の消防ラッパの実態については関係者にも分からなくなっていたことになる。
¹³ （奥中 2017）
¹⁴ 『前橋市史』第4巻（1978）1166。
¹⁵ 『富士見村史』（1954）323~344。
¹⁶ 『勢多郡横野村誌』（1956）382。
¹⁷ 『桐生消防史』（1982）156~160。この点検で用いられたラッパ譜は、後述するB「喇叭符」（岩下文書）である。
¹⁸ 『東村々誌』（1959）142。
¹⁹ すべてを列挙できないが、他に以下のような事例もある。
【1895年2月】大間々消防組が2部から5部になった際に消防器具として各部にラッパが1個（『大間々町誌』（2001）111.）。
【1895年10月】横堀消防分団の「喇叭 式個 明治二八・一〇・九〔新調〕」（『子持村誌』（1987）361.）。
【1896年1月】木瀬村の「消防器具目録 木瀬消防組二部（上増田）」に「喇叭 真鍮 四 明治廿九年一月十六日」（『木瀬村誌』（1995）674.）。
【1896年】「〔1894年に消防組が創設され〕各部内には標旗係・標灯係（高サ一米位の大提灯）警報係（半鐘を打ち鳴らす）火手係・唧筒係・水手係・雑事係に別れ明治二十九年に喇叭が支給され喇叭手が置かれた。」（『箕郷町誌』（1975）356.）。
²⁰ 『消防組織』（A01810M 647 2-1）。ただし、この文書には楽曲についての具体的な情報は含まれていない。この『消防組織』には他にもラッパ手増員に関する申請書などが含まれている。
²¹ 筆者所蔵。国立国会図書館近代デジタルライブラリーで閲覧可能。
²² 『桐生消防史』（1982）160。
²³ 筆者所蔵。
²⁴ 群馬県立文書館の所蔵資料目録検索で「根岸泰司」を検索すると、131件の文書がヒットする。そのなかに、「施主勢多郡荒砥村大字西大室村・根岸泰司」が、「根岸重治郎不幸・行年五拾八年」（1890年10月27日）という文書を記しているの、根岸泰司は重次郎の嗣子と考えられる（根岸重治郎は荒砥村大字西大室村の戸長）。
²⁵ 「下大屋村産泰社」は、現在も前橋市下大屋町にある「産泰神社」。
²⁶ 静岡文化芸術大学図書館所蔵。
²⁷ 「消防組点検規則」（1900）、「消防組員集合整頓ノ方法及点検順序」（1900）、「独逸唧筒取扱法」が収録されている。
²⁸ 筆者所蔵。
²⁹ 群馬県警察部保安課編『消防提要』（煥乎堂 1929）2。
³⁰ 群馬県立文書館所蔵。
³¹ A『消防組操法・雲龍水取扱法』やD『消防の栞』を指しているのか、それともラッパ譜に法的根拠がなく、消防操典の附録的な扱いにすぎなかったことを比喩的に言っているのかは判断できない。
³² 山口常光はラッパ譜の「歌詞」について、「此歌詞は喇叭の節に合せて歌ふものではなく、其喇叭譜の精神を示したものである」と述べている（山口 1937：62）。

³³『消防喇叭教本』（1938）に掲載されている「消防喇叭教範」は以下の通り。

訓令甲第五号（保）	警察部 警察署
消防喇叭教範左ノ通定ム 昭和十三年三月十八日	群馬県知事 土屋正三
第一条 消防喇叭ハ音譜ニ依リテ号令、命令ヲ伝ヘ士氣ヲ鼓舞シ、敬意ヲ表シ、又ハ偉容ヲ整フル等二用フルモノトス	
第二条 喇叭音律ノ正否ハ直チニ消防全般ノ規律ニ関スルノミナラズ其ノ士氣ニ影響ヲ及ボスベキヲ以テ之ガ吹奏ハ最モ厳格ニシテ且爽快、純正ナルヲ要ス	
第三条 不動ノ姿勢ニ於ケル喇叭ノ保持法ハ懸紐ヲ頸ニ懸ケ右手ニテ握巻ヲ握ルモノトシ其方法ハ拇指ヲ上ニ其二ノ他ノ指ハ閉テ接著管ヲ輕ク脈部ニ接シ中指ヲ概ネ柁ノ縫目ニ当テ喇叭ハ水平ニ保チテ正シク前方ニ向ハシムルモノトス 行進中ハ之ヲ自然ニ振ルベシ	
第四条 喇叭ヲ吹奏セントスルトキハ捷路ヲ經テ前ニ挙ゲ接著管ヲ左方ニ吹口ヲ唇ニ接スルト同時ニ前身ト接著管トヲ水平ニ保チ前方ニ位置スベシ 吹奏終了シタルトキハ前項所定ノ反対要領ヲ以テ旧位ニ復スルモノトス	
第五条 第一条ニ定ムル音譜別冊ノ如シ（別冊略ス）	

³⁴筆者所蔵。

³⁵楽曲のタイトルは、各ラッパ譜によって微妙に異なる場合があるが、煩雑さを避けるため、筆者の判断で類似するタイトルを修正して統一したところがある。

³⁶Dが刊行された1908年当時、「警部長」の役職が「警務長」だったため。

³⁷すでに述べたように、AとCの「ラ」の位置に記されている音符は、「ソ」に読み替える。

³⁸11番目の「ド」の音の右隣の音符が、虫食いのため音高は読み取りにくい、明らかに2つの音（「ドーミ」？）が記されている。全体では14個になり、A・Bより1個多い。

³⁹D～Gにも〈急ギ掛レ〉は収録されているが、AやCとは全く異なる曲である。

⁴⁰注10参照。

⁴¹同じ曲が継承された例には、他にも、A～Eの〈部外引揚ケ〉、C・D・E〈分レー休メ〉、C・D・E〈其俣右向ケ〉〈其俣左向ケ〉がある。

⁴²他にも、〈消防隊伍之禮〉はC・Dが同一だが、Eになると新たに8小節が加わる。

⁴³将官礼式の軍隊ラッパ譜〈海行かば〉は、『陸海軍喇叭譜』（1885）に収録されていたが、1899年にフランツ・エッケルトによって新たに作曲され、1930年に部分的に改正された（山口 1972：41）。F・Gの〈海行カバ〉は、1930年の改正バージョンに依拠している。

⁴⁴軍隊間敬礼の軍隊ラッパ譜〈皇御國〉は、『陸海軍喇叭譜』（1885）が初出。ただし、1930年に改正され16小節から8小節に縮小された（山口 1972：42）。F・Gは1930年バージョンに依拠している。

⁴⁵『陸海軍喇叭譜』（1885）が初出の〈國ノ鎮メ〉は、陸軍では1930年に部分的に改正された（山口 1972：42頁）。F・Gの〈國ノ鎮メ〉は1930年バージョンに依拠している。

⁴⁶『陸海軍喇叭譜』（1885）の〈葬礼途上〉が、1910年の改正により〈吹なす笛〉という別の曲に差し替えられた（山口 1972：43）。F・Gは1910年バージョンに依拠している。

⁴⁷E（1929）の号音〈分レー休メ〉、〈其儘右向ケ〉、〈其儘左向ケ〉、〈出水信号〉、〈消防隊伍之禮〉、〈東へ掛レ〉、〈西へ掛レ〉、〈南へ掛レ〉、〈北へ掛レ〉などが廃止。軍隊のラッパ譜に由来する号音〈退却〉、〈開散〉、〈右向ケ〉、〈左向ケ〉、〈後列開ケ〉、〈後列ツメ〉なども廃止。

⁴⁸〈徒步行進〉（1885）は800小節をこえる長大な曲だが、さすがに長すぎたのか、その後、〈徒步行進〉（1903）では96小節に短縮。1910年にはタイトルを〈速步行進〉と改称し、〈其一〉32小節、〈其二〉48小節に整理された。

⁴⁹文字譜で記された〈駆足〉（1896）は、全体で32小節の『陸海軍喇叭譜』〈駈步行進〉（1885）の前半16小節と一致している。

⁵⁰〈新丸ス〉と〈陸軍〉は、タイトルは異なるものの同一曲で、『陸海軍喇叭譜』〈徒步行進〉（1885）に由来する。〈新丸ス〉は16小節目まで、〈陸軍〉は48小節目まで五線譜で記されている。

⁵¹〈新坂丸ス〉は、32小節の『陸海軍喇叭譜』〈登坂〉（1885）に由来し、五線譜で16小節目まで記されている。

⁵²掲載した『喇叭符号』の譜例は、国立歴史民族博物館所蔵（所荘吉旧蔵炮術秘伝書コレクション）。

⁵³『喇叭符号』（1867）の〈右二向ノ換〉〈左二向ノ換〉の冒頭部分も同一である。

⁵⁴『騎兵操典』（1883）「基礎教練」の約50曲には一致する曲はない。

⁵⁵群馬の〈喇叭手呼び〉とよく似たフレーズの『喇叭符号』〈喇叭手呼〉（1867）と同じ譜が、「Le rappel aux clairon」として（*Petite méthode de clairon d'ordonnance*, Paris, 1863, 19.）、また〈他村引揚〉と同じフレーズをもつ「散兵螺笛譜」〈右側向面変換〉（1869）と同じ譜が「Changement de direction a droite」として（*École des sonneries de manoeuvre*, Paris, 1864, 19.）掲載されている。

⁵⁶筆者の手元には「歩兵第一連隊」が録音した「軍隊ラッパ 中丸須行進曲」というSPレコードがある（獅子印 福泰留声危機公司 317）（録音年・録音場所等不明）。ここには18番までが収録されているが、C〈中丸ス〉（1896～97）とおおよそ一致している。

⁵⁷「Le pas de charge」は、*Petite méthode de clairon d'ordonnance*, Paris, 1863, 17. や、*Méthode pour le clairon*, Paris, 1870, 16. など、多くのラッパ譜に収録されている。

⁵⁸*Réglement du 12 juin 1875 sur les manoeuvres de l'infanterie*, Lyon, 1877, 168.

⁵⁹*Méthode de clairon d'ordonnance*, Paris, 1869, 22.

⁶⁰筆者が所有する、陸軍名古屋鎮台の手書きラッパ譜『喇叭記帳』（1885）は、『陸海軍喇叭譜』（1885）が制定される約2ヶ月前の「十月三日」の日付が記されたラッパ譜で、1885年以前の陸軍のラッパ譜を検討する上で重要な史料だが（〈坂丸そ〉などが含まれている）、その内容についての詳細な検討は、別稿に譲りたい。

⁶¹C〈■■■レ集マレイ〉（1896～97）も同一譜。

⁶²*École des sonneries de manoeuvre*, Paris, 1864, 10.

⁶³軍隊のラッパを消防で使うことを避けたにもかかわらず、手書きのC（1896）に『陸海軍喇叭譜』（1885）に由来する曲が採譜されているのは、それらの楽曲が非公式には吹奏されていたことを示しているのかもしれない。

⁶⁴注7、8参照。

⁶⁵明治初年から1885年までの陸軍や警察におけるラッパ受容の実態については今後の課題として残ったが、資料が豊富に存在するとは思えず、解明は困難だと思われる。

⁶⁶「陸軍喇叭譜改正ノ件」の付箋には

喇叭手教育期間並同日数ノ減少ニ伴ヒ其教育ヲ容易ナラシムル為左ノ如ク改正ス
一、全般ニ互リ吹奏困難ナル譜形ヲ容易ナルモノニ改ム（但シ之カ為所要ノ莊重性ヲ害セザルカス）

とある（JACAR：C01001227300、大日記甲輯昭和06年（防衛省防衛研究所））。

⁶⁷『岩手県消防鑑鑑』（1913）に収録されているラッパ譜（28曲）や、青森県『消防組諸規則』（1923）に収録されているラッパ譜（17曲）、『佐賀県消防喇叭譜』（1934）（29曲）は、軍隊のラッパ譜に由来するものを除くと、群馬の消防ラッパ譜と共通する楽曲は存在しない。

※ 本研究は文部科学省科学研究費、基盤研究（C）「近代日本におけるラッパ受容に関する基礎的研究（16K02343）」の助成を受けたものである

群馬県の消防ラッパ譜（7種）の曲目一覧

典拠	陸軍が1885年まで使っていたフランスのラッパ譜
	陸軍が1885年以降使っていた日本のラッパ譜
	東京の1887年の消防ラッパ譜

* 斜字は文字譜

	喇叭ノ符 (1895)	喇叭符 (1895)	喇叭符号手帳 (1896~97)	消防の衆 (1908)	消防喇叭音譜 (1929)	消防喇叭教本 (1938)	消防喇叭教本 (1940)
敬礼			君が代	君が代	君が代	君が代	君が代
	知事出場		知事出場	知事出場	知事出場	知事（海行カバ1回）	知事（海行カバ）
	警部長出場		警部長出場	警務長出場	警部長出場	警察部長（皇御国2回）	警察部長（皇御国2回）
	警察署長出場	署長出場	署長出場	署長出場	署長出場	警察署長（皇御国1回）	警察署長（皇御国1回）
						拝神（国ノ鎮メ）	拝神（国ノ鎮メ）
招呼	組頭呼ビ	組頭吹呼	組頭呼ヒ	組頭呼ビ	組頭呼ビ	組頭	団長
	各部頭呼ビ		各部頭呼ヒ	部頭呼ビ	部頭呼ビ	部頭	分団長
			巡查呼ヒ	巡查呼ビ	巡查呼ビ		
	喇叭呼ビ		喇叭呼ヒ	喇叭長呼ビ〔譜は空欄〕	喇叭長呼ビ	喇叭長	喇叭長
	伝令使呼ビ		伝令使呼ヒ	喇叭手	喇叭手呼ビ	喇叭手	喇叭手
	一部頭呼ビ	一部吹呼	一部頭呼ヒ				
	二部頭呼ビ	二部吹呼					
	三部頭呼ビ	三部吹呼					
	四部頭呼ビ	四部吹呼					
	五部頭呼ビ						
	六部頭呼ビ		六部頭呼ヒ				
	七部頭呼ビ		七部頭呼ヒ				
	八部頭呼ビ		八部頭呼ヒ				
	九部頭呼ビ		九部頭呼ヒ				
	号音			拾部頭呼ヒ			
			拾壹部頭呼ヒ				
			拾貳部呼ヒ				
			前家掛り呼ヒ				
			荒砥呼ヒ				
			木瀬村呼ヒ				
初メー		始メ	初メイ	始メ	始メ	始メ	始メ
止メー		止メ	止メイ	止メ	止メ	止メ	止メ
部外引揚レ		引揚	部外引揚ケ	部外引上ケ	部外引上ゲ	解レ（部外引揚）	解レ（引揚）
他村引揚		他村引揚	他村引揚ケ	他村引上	他村引上ゲ		
急ぎ掛レー			急ぎ掛レ	急ぎ掛レ	急ぎ掛レ	急ぎ掛レ	急ぎ掛レ
食事			食事	食事	食事	食事	食事
集レー			■集マレイ	集レ	集レ	集レ	集レ
			氣ヲ付ケ	氣ヲ付ケ	氣ヲ付ケ	氣ヲ付ケ	氣ヲ付ケ
			番号	人員点呼	人員点呼	点呼	点呼
			前へ	前進メ	前へ進メ	前へ	前へ
			止マレイ	止レ	止レ	止レ	止レ
			駆足し	駆足の譜	駆足	駆歩	駆歩
			退去	退却	退却		
			別レイ	開散	開散		
			右向ケ	右向ケ	右向ケ		
			左向ケ	左向ケ	左向ケ		
			後列開ケ	後列開ケ	後列開ケ		
			真場ニ休メ	其場ニ休メ	其場ニ休メ		
			食事分配	食事分配	食事分配		
			非常信号〔命ヲ捨テ〕	命ヲ捨テ	命ヲ捨テ		
			休ミ別レ	分レー休メ	分レ休メ		
			其低右向ケ	其低右向ケ	其儘右向ケ		
			其低左向ケ	其低左向ケ	其儘左向ケ		
			出水信号	出水信号喇叭	出水信号		
			消防隊伍之礼	消防隊五之礼	消防隊伍の礼		
				東へ掛レ	東へ掛レ		
				西へ掛レ	西へ掛レ		
				南へ掛レ	南へ掛レ		
				北へ掛レ	北へ掛レ		
				後列ツメ	後列ツメ		
				出火信号喇叭	出火信号		
					零		
				1	一		
				2	二		
				3	三		
				4	四		
				5	五		
				6	六		
				7	七		
			8	八			
			9	九			
			10	十			
			家ヲ崩	家ヲ崩セ			
			待テ	待テ			
			点検	点検			
			点検納メ				
			消防隊号ノ部	消防隊号の部			
		後へ					
		分列■前へ					
		右イナライ					
		尚レ					
		合セイ					
		後列進メイ					
		回レ右					
					休メ	休メ	

群馬県の消防ラッパ譜（7種）の曲目一覧

典拠	陸軍が1885年まで使っていたフランスのラッパ譜
	陸軍が1885年以降使っていた日本のラッパ譜
	東京の1887年の消防ラッパ譜

* 斜字は文字譜

	喇叭ノ符 (1895)	喇叭符 (1895)	喇叭符号手帳 (1896～97)	消防の葉 (1908)	消防喇叭音譜 (1929)	消防喇叭教本 (1938)	警防喇叭教本 (1940)
行進			陸軍〔1-6〕 新丸ス〔1-2〕	行進喇叭〔1-12〕	徒歩行進 (行進ラッパ)〔1-12〕	速歩行進 其ノ一	速歩行進 其ノ一、其ノ二
			駈足	駈足行進	駈足行進	駈歩行進	駈歩行進
			葬礼途上	葬礼途上	葬礼行進	送葬行進	葬送行進
				分列式	分列式	分列式 (速歩行進 其ノ一)	分列式 (速歩行進 其ノ一、其ノ二)
			旧丸ス〔1-15〕				
			旧丸スロ〔1-2〕				
			中丸ス〔1-25〕 〔中丸ス〕〔1-4〕				
			坂丸ス〔1-2〕				
			新坂丸ス〔1-2〕				
			学丸ス〔甲・乙〕				
			タイトル不明の曲				

